

令和7年度 第46回
学校茶道エッセイ集



多くの力作から選考された「エッセイ集」です。
日本の伝統文化の素晴らしさ、
四季の美しさを見つけ出す様子や、
もてなしとは何かを考え、
慈しみ感謝するすがたが、
素直な言葉で綴られています。
どうぞ、みなさまでお読みください。

はじめに

日頃より学校茶道の推進にご理解とご協力をいただき、有り難うございます。

この「学校茶道エッセイ」事業は、茶道を学ぶ学生・生徒の皆さんに学校や地域における茶道活動のエピソードや体験談、感想や意見を自由に綴ってもらうものです。

本年は、大学生・高等専門学校生・各種専門学校生を対象とした「学生の部」に198点、高校生・中学生を対象とした「生徒の部」に1,674点の応募がありました。

淡交会総本部での一次選考の後、選考委員5名による選考委員会を経て、「学生の部」に優秀賞3点、第一席6点、佳作10点と、「生徒の部」に優秀賞9点、第一席21点、佳作33点、更には、本事業に積極的にお取り組みいただいた学校の中から学校賞として2校を選出いたしました。

今回の応募作品からは、茶道の稽古が日常の意識に変化をもたらし、学校での学びや友人・家族との時間をより豊かなものに行っている様子がうかがえました。

学生・生徒の皆さんには、絶えず変化する社会情勢の中にあっても、茶道で培った柔軟な心で他者と関わり、たくましく人生を歩んでいかれることを願っております。

最後になりましたが、「学校茶道エッセイ」事業に対する関係各位のご支援とご協力並びに指導者の皆様の日々のご努力に感謝を申し上げ、ここにエッセイ集を刊行いたします。

令和8年2月
一般社団法人 茶道裏千家淡交会総本部

「学生の部」、「生徒の部」ともに優秀賞・第一席は、学校所在地の都道府県順に掲載しています。

また、裏千家ホームページ (<https://www.urasenke.or.jp/>) にて、この冊子に掲載されている作品をご覧いただけますので、学生・生徒の皆さんにご案内いただければ幸いです。

エッセイ
作品ページ



目次

学生の部

※学校所在地の都道府県順に掲載しています。
() は学校所在地

優 秀 賞

働きを見つめる	北海道教育大学 釧路校 大学院1年 (北海道)	麻原 鈴 1
茶道が紡ぐ、時空を超えた縁	上智大学3年 (東京都)	林 陽向子 2
心がそっと届くひととき	神戸大学4年 (兵庫県)	中西由香理 3

第 一 席

茶道と歩む私の未来	防衛医科大学校4年 (埼玉県)	前田 浩和 5
美しいもの	防衛医科大学校3年 (埼玉県)	可児 優奈 6
相手を思いやり、今日を生きる。	東京都立大学3年 (東京都)	潮田 真宏 7
一服のぬくもりから	青山学院大学2年 (東京都)	荒井 葵 8
茶道に触れて感じたこと	皇學館大学4年 (三重県)	布藤 綾乃 10
一碗に込める心	立命館大学3年 (京都府)	田島 甘菜 11

佳作一覧

12

生徒の部

優 秀 賞

静けさは僕を走らせる	高崎市立高崎経済大学附属高等学校2年(群馬県)	松本 凜 13
男子校で深める「和敬清寂」	慶應義塾志木高等学校3年(埼玉県)	圖子田 周 14
向日葵に込めた願い	渋谷教育学園幕張高等学校3年(千葉県)	井上 紗良 15
バトンを繋ぐ	千葉県立清水高等学校3年(千葉県)	中村 颯来 16
型の中の自由	富山県立魚津高等学校3年(富山県)	大藏 夕茉 17
余白	山梨県立吉田高等学校3年(山梨県)	天野ひより 18
思いやりをもって	静岡県立三島北高等学校2年(静岡県)	小澤想葉花 19
一期一会を味わう—花びら餅とともに—	滝高等学校1年(愛知県)	卯田 彩乃 20
静けさの中で見つけたもの	飯塚市立飯塚第一中学校3年(福岡県)	堤 寿咲 22

第 一 席

先輩になるまでの一年間	北海道芽室高等学校2年(北海道)	川東 暖奈 24
一碗に込める思い	宮城県仙台二華高等学校2年(宮城県)	原田 栞 25
時代と茶道のギャップ	伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校5年(群馬県)	小林 洸 26
飲むように	慶應義塾志木高等学校3年(埼玉県)	高瀬 岳 27
茶室へ	慶應義塾志木高等学校3年(埼玉県)	渡邊 安里 28
私は今も茶道をしている	東洋英和女学院高等部2年(東京都)	織田 愛梨 29
僕の高校生活を変えたもの	大成高等学校2年(東京都)	坂間 天音 30
茶道とサッカーの共通点	横浜市立小田中学校2年(神奈川県)	鵜名山日花里 31
お茶のひとり歩き	横浜市立東高等学校2年(神奈川県)	向井こゆき 32
「今」の大切さ	富山市立奥田中学校3年(富山県)	吉野 凜 33
茶道を通じて感じたこと	石川県立飯田高等学校2年(石川県)	道下ひな乃 34
茶碗に映る一瞬の世界	浜松聖星高等学校2年(静岡県)	富田 琉杏 35

私が魅せられた茶道のこころ	静岡県立藤枝西高等学校2年（静岡県）	森 葉月 36
和敬清寂のひとしづく	常葉大学附属常葉高等学校1年（静岡県）	高田華帆 37
小さな恩返し	西尾市立鶴城中学校3年（愛知県）	榊原唯愛 38
「上手に点てれましたね」	愛知県立横須賀高等学校2年（愛知県）	若山結衣 40
決まりのなかでほどけていくもの	滋賀県立石山高等学校3年（滋賀県）	葛本みな 41
未来を楽しむ	兵庫県立御影高等学校2年（兵庫県）	藤井彩乃 41
心が座る場所	福岡県立修猷館高等学校1年（福岡県）	池ノ上 心 42
茶室、それは私の居場所	福岡県立嘉穂高等学校2年（福岡県）	武下桃佳 43
にじむ想いと、つながる心	大分県立大分舞鶴高等学校2年（大分県）	植木佑香 44

佳作一覧

46

学校賞

上智大学

愛知県立横須賀高等学校

淡交会総本部にて一次選考の上、選考委員会にて選考しました。

〈選考委員〉伊崎 一夫氏 関西福祉大学教育学部大学院研究科客員教授
石塚 修氏 筑波大学人文社会系教授
筒井 紘一氏 茶道資料館顧問
波佐間 清氏 元下関市教育委員会教育長
吉田 幸一氏 前プール学院理事長兼中学校・高等学校長

働きを見つめる

北海道教育大学 釧路校 大学院1年（北海道）

麻原 鈴

「働き」とはどんな意味を持つのでしょうか。茶道を始めて4年目でこの疑問を持つようになりました。お茶の世界では「働き」という言葉がたくさん行き交っています。その言葉が使われている話の流れから、今まで私が認識していた労働や仕事という「働き」という意味ではないと気づきました。そこで、この言葉がどんな意味を持つのか考えてみました。

部活の先生は、他者がこれから行うことに対して助力したときに「今のはよい働きですね」とその言葉をお使いになります。この経験から「働き」という言葉は相手を思いやることで生まれる行動を意味するのだと考えました。また、部活の先生にこの言葉について質問すると「コンスタント、綺麗になる、気づくことが増える、成長し器が大きくなる、見える目見る目、感じる心」という「働き」をかたどるたくさんのお言葉をいただきました。そこから、どうしたらその行為が使えるようになるか、また使えることでどの様な姿になれるかを学びました。

では、その言葉はどのようにしたら体現できるのでしょうか。その手がかりは3月に受講させていただいた学生セミナーにあったように思います。当時、私は膝を悪くしており、正座ができない状態でした。茶道において正座ができないことは致命的です。しかし、御家元をはじめ今日庵の方々を私を優しく受け入れてくださいました。そのため、私の心には配慮していただいている感謝と沢山の方々にご迷惑をおかけしてしまっている申し訳なさが混在していました。そのような心持ちでお稽古に打ち込んでいたため、点茶盤で炭手前のお稽古をさせていただくことになったときも、私にはグループの皆さんは自分のやりたいお稽古があったはずなのに私に合わせていただいて申し訳ないという気持ちがありました。しかし、同じグループの男性が私に近づき、「点茶盤で炭手前のお稽古ができる貴重な機会をありがとう」と笑顔で伝えてくださいました。その瞬間、私が持っていた負い目がふっと軽くなりました。私が感じていた負担を成長する機会と捉え伝えてくれたことがとても嬉しく、これも「働き」なのだと思います。このことをきっかけに、私は「働き」という意味は思いやりある言動で相手の気持ちを掬い支えることだと思いました。茶の道を歩むということは、この心持ちを育むことでもあり、私が漠然と好ましく感じていた茶道の和やかな雰囲気繋がっているのだと確信いたしました。

また、「働き」を仕事と認識していたことから仕事に対する考えも変わりました。現在、私は大学院生でありながらも昼間は学校で講師として働いています。ここでも同じ「働き」の状態に私はいます。同じ言葉を使うのはどうしてだろうと疑問に思っていたのですが、職場の方々の行動を見ているとその疑問の答えはすぐに分かりました。子どもたちが学校生活を穏やかに過ごせるよう、学校はひとつのチームとして教員同士、相手の動きを見て動くことでその場を支



え合っていたのです。相手と支え合うこと、これも「働き」を表すもののひとつだと思います。

茶道と出会えたことで、私は「働き」に疑問を持ち、様々な人によって、「働き」とは相手を思い行動することでその空間にいる人や物事をより円滑、かつ、お互いが和やかな気持ちで過ごせるように支え合うことだと学ぶことができました。そして、その「働き」の心は、視野を広げ、気づくことが増えれば増えるほど大きくなることを知りました。このことから、私は「働き」の心を学び続け、気づく目を育むことで、よりよい茶人・働き手となれるよう努めていきたいと思うことができました。「働き」という2文字を立ち止まり見つめ考える機会を与えてくれた茶道に出会えてよかったと心から思います。

優秀賞

茶道が紡ぐ、時空を超えた縁

上智大学3年（東京都）

林 陽向子

私は大学のゼミ合宿で、島根県の隠岐島海士町を訪れた。後鳥羽院が約20年間を過ごされたというこの地で、私たちは歴史の深淵に触れることになった。中でも、隠岐神社の凜とした佇まいと、隣接する後鳥羽院資料館で学んだ上皇の波乱に満ちた生涯は、心に深く刻まれた。

資料館の展示を巡っていると、ふと目に留まったものがあった。それは、優雅な曲線を描く茶碗や、古の趣を感じさせる茶杓など、一式の茶道具だ。つい先日、茶道のお稽古で貴人点を習ったばかりだったこともあり、特別な関心を持って見入った。ガイドの方に尋ねると、驚くべき事実を知る。これらの道具は、後鳥羽院にゆかりのある茶道具で、令和4年6月25日には千宗室御家元が献茶式を奉仕されたという。

献茶式。その言葉を初めて耳にした私は、その場でスマートフォンを取り出し、夢中で調べた。それは、神仏や故人の御霊に茶を献じる儀式のこと。後鳥羽院の御霊に、千利休から続く茶道の家元が、心を込めて茶を点てる。その荘厳な情景を想像するだけで、胸が熱くなった。

茶道は、人と人との繋がりを深めるものだと教えられてきた。お茶を点て、相手をもてなす。その一服に、互いの心を通わせる。しかし、この献茶式のことを知り、茶道が結ぶ縁は、生きている人同士だけにとどまらないのだと強く感じた。時空を超え、千年の時を越えて、遠い昔に生きた人々の心と、今を生きる私たちの心を繋いでくれる。後鳥羽院が流刑されたという辛い歴史を背負うこの地で、茶道は静かに、そして力強く、供養の心を伝えていたのだ。

献茶式の後、拝服席が設けられ、多くの人々がお茶をいただいたという。その中には、きっと私と同じように、後鳥羽院の御霊に思いを馳せ、静かに一服を味わった人がいたに違いない。私はその場にいなかったけれど、展示された茶道具を前に、家元が心を込めて茶を点てる姿、それを受け取る人々の様子を想像し、まるでその場に居合わせたかのような感動を覚えた。

茶道は、単なる作法や形式ではない。そこには、人への敬意、自然への感謝、そして亡き人



への鎮魂の心が息づいている。献茶式という厳粛な儀式を通じて、私はその本質の一端に触れることができた。後鳥羽院がこの地で過ごされた20年間。孤独の中で何を思い、何を願われたのだろうか。想像の域を出ないが、もしかしたら故郷の京都を思い、平安の雅な世に思いを馳せていたかもしれない。

茶道が紡ぐ縁は、歴史という大きな流れの中で、私たち一人ひとりの心に静かに流れ込んできた。そして、その縁は私自身がこれから歩む道にも、きっと新たな光を灯してくれるだろう。いつかまた、この海士町を訪れ、今度は自ら一服の茶を点ててみたい。静かに手を合わせ、後鳥羽院の御霊に、そしてこの地で茶道を守り続ける人々に、感謝の心を捧げたい。

この小さな島で出会った茶道具は、私に大きな気づきを与えてくれた。それは、茶道が単なる趣味や文化ではなく、過去と現在、そして未来を繋ぐ、生きた心の道だということ。そして、一服の茶には、時空を超えて人々の心を結びつける計り知れない力があるということを感じた。

優秀賞

心がそっと届くひととき

神戸大学4年（兵庫県）

中西 由香理

茶道を通じて感じたこと、それは茶道という経験がわたしの将来の夢に深くつながっているということだ。現在大学4年生の私は、幼い頃からの看護師になりたいという夢に向けて実習や勉強に励んでいるのだが、その根底には茶道で培った相手を思う心配りの精神がある。茶道と看護は一見全く違う世界に見えて、どちらも相手を思う心を形にする営みであると私は感じている。

3歳で始めた茶道は私にとって生活の一部である。茶道ではたくさんの美しい言葉と出会う機会があるが、私がいつも大切にしている言葉は「和敬清寂」である。その中でも「敬」は、相手を思いやる心を形にすることだと私は学んできた。相手を尊重し、その瞬間を大切にすることは茶道の動作の一つひとつに込められている。相手の好みに合わせて部屋の環境を整え、味の濃さやお湯の温度を調節し、季節に合った可愛らしいお菓子を選び、今この瞬間を楽しんでもらいたいという思いでお茶を点てる。そこには、相手がほっと一息ついている瞬間を想像している自分がいた。私が点てるお茶とこの静かな空間が、相手にとって心の拠り所のような、そんな特別な空間になりますようにと、願っていた。

幼い頃から続けてきた茶道で学んだ、この相手を思いやる気持ちが、私の看護の小さな心配りにつながっている。この経験が、患者さんに安心感を与えられる看護師になりたいという幼い頃の私の夢を支えているのだ。実際に患者さんに関わる際も、新鮮な空気が通るように環境を整え、お湯の温度や声の大きさ、話すスピードを相手に合わせてケアをしている。自分のケアが、患者さんにとって支えとなりますようにと、心を込めてきた。そして、その小さな気遣いが患者さんに大きな安心をもたらすことを実感している。今でも記憶が鮮明で、時折、私の



頭をよぎるのは、対人関係に困難を抱えながら生きてきた患者さんから言われた言葉である。「心を開かない自分に対しても、あなたはわたしの好きなことや嫌なことを覚えていてくれて、さりげなく配慮してくれる。そして、何も話さないわたしにも温かい声をかけてくれる。だからわたしは安心してここにいられる。ありがとう」と。優しい風が窓から差し込む静かな部屋で、微笑んでくれた患者さんの顔が頭から離れない。その一言で、ほんの少しの気遣いが患者さんにとってどれほど大きな安心につながるのか、改めて気づかされた。

何百年も前からつづくこの思いやりの文化がこうして医療の世界にまで届いている。茶道は私を織りなす糸であり、その考え方は私の一部である。茶道をしなかったら出会えなかったであろう自分の一面に出会えた奇跡を、私はこれからも大切にしていきたい。そして、茶道の精神が私の中に息づいていることを誇りに思い、この精神を誰かの心に届けたい。茶道が国や時代を越えて人々の心を和ませてきたように、私もまた小さな心配りを積み重ね、これから関わるたくさんの患者さんやそのご家族に安心を届けられる存在でありたい。

茶道で育まれた思いやりの心を大切にしながら、これからも患者さん一人ひとりの心に寄り添える看護師を目指していきたい。そして最後に、こんな素敵な心に気づかせてくれた茶道に「ありがとう」を伝えたい。

茶道と歩む私の未来

防衛医科大学校4年（埼玉県）

前田 浩和

私が茶道を始めたのは大学に入ってからでした。きっかけは畳の部屋に漂う落ち着いた空気に惹かれたためです。茶道部に入部して4年、今ではお湯の沸く音や茶筌の響きだけが流れる静けさの中で自分と向き合う時間は、慌ただしい学生生活の中で心を落ち着ける大切なひとときとなっています。

茶道を続けるうちにこの「静けさ」が特別な意味をもつようになりました。茶室は外の世界から切り離された特別な空間です。その中で心を整える時間は、将来どんなに忙しくとも自分をリセットし精神の安定を得る場になると感じています。医師を志す私にとって、この感覚は欠かせない支えになるはずです。

茶道のお稽古では「間」や「余白」を大切にすることを学びました。落ち着いた心で行うお点前の所作は流れるようでありながら、その合間にはしばしば静寂があり全体を落ち着いたものにしていきます。医師が患者様と向き合うとき、ふと訪れる沈黙が逆に相手の気持ちや本心を引き出すきっかけになることがあります。茶室でのお点前における静寂と医療の場における沈黙は、いずれも相手と心を通わせる大切な「間」だと思います。

さらに、茶道と医療の共通点を実感する機会がありました。医学部の高学年になると医療面接の練習が始まります。患者様との会話のスキルを学ぶ実習です。そこではシナリオが予め決められているのですが、実際に行ってみると、医師役の身振り手振りや相槌などからもそのひとの人格や心の在り方が自然ににじみ出て患者側に伝わる場合があります。決まった手順を守りつつもそこに心情を込めてこそ初めて相手に思いが伝わる。こうした形式の奥にある「人の心の交わり」を大切にす姿勢は茶道と医療の双方に共通していると気づきました。

また、茶道は日本文化として世界に誇れるものでもあります。私たちの大学を卒業した医師は、しばしば災害復興や人道支援のために海外に派遣されます。自分も将来海外で医師として活動する際には、茶道を通じて文化や言語の壁を越えた心の交流ができるのではないかと感じています。一服のお茶を点でて差し出すまでの一連の所作には、言葉を超えて相手に伝わる温かさがあるからです。

もちろん、医師として働き始めれば多忙を極め茶道を続けることは容易ではないでしょう。忙しい中でどう茶道を続けるかという葛藤は常にありますが、それでも茶道は私にとって生涯の心の支えであり人生の指針です。これからも茶道の精神を胸に人との一期一会の出会いを大切にしながら歩みを重ねていきたいと思っています。

茶道は私の未来に静かに寄り添い続けてくれる存在です。



美しいもの

防衛医科大学校3年（埼玉県）

可児 優奈

私は、美しいものが好きだ。服を着こなすときも、髪を結うときも、何よりも美しく整えることを大切にしたいと思っている。ピンと筋の通った直線の中に、柔らかくなめらかな曲線が宿るような均整のとれた美しさに、昔から強く惹かれてきた。外見も内面も、そうした美しさに満たされたいと願っている。それは女性としての美しさとは限らない。日本人としての美しさとも限らない。

そんな私が、茶道の稽古の中で初めて手にした茶碗を見たとき、正直、戸惑いを覚えた。織部の碗のいびつな形、備前の碗は土気を帯びたくすんだ色合い。表面に残るむらは火炎のなせる技と聞いたが、それらがなぜ素晴らしい茶碗と評されるのか、すぐには理解できなかった。私は、均衡の取れた形や、明るい清潔感のある色味、なめらかな表面の器こそ美しいと思っていた。けれど、何度も見て、手に取り、使い続けるうちに、少しずつ自分の中の感覚が揺らいでいった。手に馴染む感触、ほどよい重みのやわらかさ、口に当たる縁のぬくもり、湯を注いだ時の音色、器からゆっくりと流れてくる抹茶の味わい。そういった五感に触れる経験を通して、美しさは視覚的な均衡ばかりに宿るものではないのかもしれないと思うようになった。物であっても、どこに美しさを感じるかは、必ずしも見た目だけではない。茶道を始めて程なく、そう気付けたことで、自分の中に新しい視点と茶道に対するさらなる期待感が芽生えてきたように思われる。

茶道を通して私の「美しいもの」に関する価値観は少しずつ変化している。それは必ずしも今の自分の感覚の方が優れているということではない。以前の自分と比較して、どちらが上か下かを決める必要もなければ、数値的に比較して成長を決めることにも、あまり意味を感じていない。大切なのは優劣を決めることではなく、そのとき自分が何を感じたのかに丁寧に向き合うこと。そして、その感覚を素直に楽しみ、やがて自然と生まれる感性の変化をまた楽しむこと。そうした心の在り方こそが、茶道が私に教えてくれた、もう一つの美しさだったのかもしれない。

今でも、私は均整のとれた美しさが好きだ。清らかで、凜とした佇まいには今も心が惹かれるし、それはこれからも変わらないだろう。一方で、かつて「少し苦手」と感じていたお茶碗に対して、それを無理に好きになろうとせず、そう感じた自分をそのまま受け入れられるようにもなった。茶道は、そんな柔らかな心の在り方を私に教えてくれたように思う。

桜は咲き誇る春だけが美しいわけではない。夏の緑葉も、秋の紅葉も、冬枯れの幹も枝も、それぞれに美しさがある。そこに優劣はない。変化するからこそ、美しいのだと思う。茶道では、季節ごとに道具や点前が変化する。その変化を受け入れ、季節を映し出しながらも、茶道の所作には一貫した美しさがある。静の美、動の美、そして余韻の美など、茶道はあらゆる角度とあらゆる瞬間で美を追い求めているように思う。



私は、主客と場に織りなされる静かな美しさと、時間と空間の随所に作られる余白の美に惹かれて茶道部に入ったが、今では時節と対象に合わせて変幻自在に揺れ動く美にも惹かれつつある。ひとつの価値観の軸で美を追い続けてきた私と、あらゆるものに美を見だし、その都度新たな軸を育てていく茶道。その在り方は、異なるようでいて、どこかで重なっているようにも思う。

茶道は、私がそれまで持ち続けていた美に対する価値観を一新させるものではなかった。けれど、その価値観の広がりを感じ、揺らぎを楽しむことを教えてくれた。

私は茶道の美の深淵を更に追求してゆくことを心に決めた。

第一席

相手を思いやり、今日を生きる。

東京都立大学3年（東京都）

潮田 真宏

「よく見ていてくださいね。きっと間違えますから」。初釜の際、私の師が言った言葉だ。そして大森立嗣監督の映画「日々是好日」の中で初釜の際に樹木希林演じる茶道の先生が言った言葉でもある。

茶道というものは一碗のお茶を点てることにたくさんの決まった所作を踏まなければならない。お茶を始めたばかりの頃は手順を覚えることで精一杯だった。一つ一つの所作のときに考えていることは「次は何だっけ?」という疑問ばかり。稽古が進み新しい点前を知る度、「手順を覚える」ことに注力した。

しかし、「手順通りにお茶を点てること」は茶道の本質ではない。先生方やほかの大学の茶会や茶事に参加すると、しばしば点前の手順が稽古で学んできたことと異なる時がある。手順通りでないことは「間違っている」のではなく、そこに趣向に叶った理由があって、もてなしの心がある。

裏千家学生セミナーを昨年受講させていただいた際、業躰先生より「潮田君は、点前は正確だけれども、亭主と客がいてはじめてお茶は成り立つのだから、客と呼吸を合わせなければいけない」と指導いただいた。

その指摘に私ははっとさせられた。今までは「次は何だっけ?」とお茶を点てる時の関心が自分に向いていた。

しかし客の目の前で茶を点て、「お茶をどうぞ」と勧めるのであれば、自分を省み、自然と調和し、相手を思いやる心が欠かせない。その事を意識してからは一つ一つの所作そのものへ思いを巡らせ、その場にいる人との調和を意識することができた。すると自然と次の所作へ流れるように体が動き、稽古がより深く一層楽しくなっていた。

初釜の際の師の「きっと間違えますから」という言葉には二つの意味があったように思う。一つは先生である私でも間違えることがあるかもしれないから、稽古だと思ってよく見ていな



さいということ。もう一つはお茶会なのだから手順と異なることも出てくる、それを単に間違ったと捉えるのではなく、そこに趣向や思いやりの心が宿っているのではと省みることをしなさいということだと思う。茶道の本質は「手順通りにお茶を点てること」ではなく、互いに心を通わせもてなそうという思いやりの心なのだ気づかされた。

私が師から薫陶を受けたことはもう一つある。それは今と向き合い、今日を生きる姿勢だ。稽古や茶会の相談など先生宅に伺うとき、常に家の前は露が打たれ、玄関をくぐると香が聞こえてくる。茶室に入ると、床にはその時に合わせ設えられており、お茶が振舞われる。どんなときでも茶室に入った際は先生より今日の床についての話がある。

床は常に季節、最近交わした言葉や出来事に深く結びつき、新たな気付きを与えてくれる。その度に、この一碗にどれだけの今日への祈りと心がこもっていたのか想いを馳せる。過去にとらわれ未来に悩み、今を見失ってばかりの私にとって、一碗を手にするのが今を味わい生きる確かな力をくれる。

相手を思いやり、今日を生きる。私が茶道を続ける理由は、それを学び実践することにある。

第一席

一服のぬくもりから

青山学院大学2年（東京都）

荒井 葵

畳に足をつけて正座をすると、しびれがくるまでの時間が年々少しずつ延びていることに気づく。幼いころの私は、ほんの数分でもう足が限界で、「まだ終わらないの？」と祖母の顔をちらちら見ていた。だけど、目の前にはいつも小さくて繊細なお菓子とゆったりと立ちのぼる湯気のお抹茶があって、その時間が「特別なもの」だという感覚だけは、確かに心の奥に残っていた。

母方の祖母は、長年茶道を学んでいた。私が祖母の家を訪ねると、床の間にはその季節に合わせた掛け軸や花が飾られていて、茶道具が並ぶ静かな空間が、いつもどこか神聖に感じられた。まだ「お点前」など知らなかった私に、祖母は時折お抹茶を点ててくれた。その時間が好きだった。静かで丁寧で、そしてお抹茶と上生菓子が美味しかった。何より、祖母の優しさと穏やかなまなざしに包まれた空気が、心をふわりとあたためてくれた。そんな思い出があったからだろう。高校には、偶然にも茶道の授業がある男子校に入学した。どこか懐かしいものに再会するような気持ちになった。しかも、男子校にしては珍しく茶道部までであると知った。ふと思い出したのが、あの祖母との静かな時間だった。そして自然と、茶道部の扉を叩いていた。

最初はもちろん苦労の連続だった。正座は相変わらず苦手だし、所作はなかなか覚えられず、道具の扱いにも戸惑った。でも、祖母がしていた所作のひとつひとつに自分も近づいていく感覚がうれしくて、稽古のたびに新しい発見があった。湯を注ぐ音、茶筌をふる腕の使い方、茶碗を差し出すときの目線に『自分だけではない時間』が流れていることに気づいた。相手のこ



とを思い、目の前の一服を大切に点てる。そこには、幼い頃に祖母から感じた優しさと同じものがあつた。

高校では、文化祭や地域の交流行事でお茶会を開く機会があつた。部員で協力し、日程を決め、席の設えを考え、そして当日は何十人ものお客様にお茶を点てる。毎回、本番が近づくと緊張もするけれど、着物に袖を通し、道具を整え、懸命に点てたお茶を「美味しかったです」と笑顔で受け取ってもらえるたびに、自分の中に静かな喜びが満ちていった。また、準備も楽しかった。とくに好きだつたのは、掛け軸や道具を自分たちで選ぶ時間だつた。ある文化祭のとき、軸を選ぶのに何日もかかつたが、最終的に感謝の想いを込めた短い一文に決めた。さらに、棗や建水、茶杓なども、季節やお客様の顔を思い浮かべながら、ひとつひとつ選んだ。その過程で、「どの道具を選ぶか」は単なる好みではなく、「誰のために、どんな時間をつくりたいのか」を考えることなのだと思つた。小さな世界の中で静かに人と心を通わせる工夫ができることに、私は深い喜びを感じた。その文化祭には、両親も足を運んでくれた。私は、祖母に初めて抹茶を点ててもらつた記憶と、これまで育ててくれた家族への感謝をこめて、自分で焼いた茶碗でお点前を披露した。父は「うまいな」とだけ言い、母は静かに笑つていた。それだけで、すべてが伝わつたような気がした。

他校の茶道部との交流も、貴重な学びの場だつた。ある女子校のお茶会では、春の訪れをテーマに器や花に淡いピンクや緑を取り入れ、まるで野にいるようなやわらかな雰囲気が出されてつた。その繊細な感性に触れ、「おもてなし」にも無限の形があるのだと思つた。大学生になつた今も、勉強やアルバイトに追われる日々のなかで、稽古の時間は私にとって心を整える大切なひとときだ。道具を並べる、空間を清める、呼吸を整えるすべての行為が「今ここ」に自分を引き戻してくれる。そして、その一服に心をこめて人に差し出すとき、そこに言葉を越えたコミュニケーションが生まれることを何度も実感している。

最近では季節の変化にも自然と目が向くようになり、旅先でもその土地ならではの茶碗や抹茶、和菓子との出会いを楽しむようになった。そうした体験を通して、お茶の時間が日常の中でもささやかな文化とのつながりを感じさせてくれるようになった。今では、家族と一緒に藤棚をつくろうとつている。春の風を感じながら一服を楽しむひとときを想像しながら、少しずつ準備を進めている。

振り返れば、祖母の一服のお茶から始まつた。あの一服に込められてつた優しさと思つたが、今の私をここまで導いてくれた。私の茶道の歩みは、少しずつ深まりながら、今もつている。茶道を通して、風の音、湯気のゆらぎ、茶碗を受け取る時の目線の交わりすべてが、人と自然と心をつなぐ静かな橋のように思える。茶道は私に、人への思いやり、自然へのまなざし、そして「丁寧に生きる」ことの美しさを教えてくれた。これからも、一期一会のこころを忘れずに、日々のなかに小さな静けさと喜びを見つけていきたいと思つた。



茶道に触れて感じたこと

皇學館大学4年（三重県）

布藤 綾乃

私が茶道と出会ったのは大学入学後すぐのことであった。茶道経験者の友人に誘われて茶道部の門を叩いたあの頃、まさか自分がこれほど長く茶道と向きあい続けることが出来るとは想像もしていなかった。振り返ってみると、茶道に対する私の感情は「恐怖」から始まり、やがて「喜び」へと変化していった。「喜び」に気づくまでの過程は決して楽しいことだけで無かったが、今では茶道が私にとってかけがえのない場となっている。

茶道部に入部した当初、私が茶道に対して抱いていたのは、漠然とした不安と純粋な恐怖だった。一切の予備知識を持たない状態で飛び込んだ私にとって、茶道の世界は謎に満ちた未知の領域であった。耳慣れない道具の名前が次々と飛び交い、茶道に関わる季節や花についての知識、さらには軸に書かれた言葉まで覚えなければならなかった。これらの知識習得と同時に、お点前の複雑な作法も身につける必要があり、私の頭は常にいっぱい状態の状態で、先生から丁寧に教えていただいても、次にどう動けばよいのか分からなくなってしまうことが頻繁にあった。茶道の奥深さと自分の知識不足の間で大きな混乱を抱えていたのだ。更に私を苦しめたのは、先生に何度も同じことを教えていただいているにも関わらず、同じ間違いを繰り返してしまうことへの申し訳なさだった。他の部員は出来るのに、先生は優しく丁寧に指導してくださっているのに、なぜ上達できないのかという自責の念も重なり、茶道への恐怖心が増幅された。加えて、先生と一対一での指導の際に、周りで他の部員が見ているという緊張感は、私にとって大きなプレッシャーとなっていた。

しかし、時間の経過とともに、茶道に対する私の感情は徐々に変化していった。茶道について少しずつ知識を蓄積していく過程で、お花やお菓子を通して季節の移ろいや日本の文化を感じることに魅力を感じたのだ。特に印象深かったのは、三重県明和町で「どんど」と呼ばれる取水口付近に咲いていた花菖蒲が「どんど花」と呼ばれているという地域の歴史を、お菓子の名前を通して学んだことであった。このような体験は、茶道が単なる作法の習得ではなく、日本の文化や歴史、そして地域の言葉を学ぶ貴重な機会であることを教えてくれた。さらに、前回できなかったことができるようになった時、新しいお稽古に進むことができた時の達成感、他に代え難い喜びをもたらしてくれた。少しずつでもお点前の作法が身についていることを実感できるこれらの瞬間は、茶道への恐怖心を和らげ、代わりに向上心を芽生えさせてくれた。なかでも、私が明確に「喜び」を感じることは出来たのは、お稽古中に点てていただいたお茶を飲む時、そして自分が点てたお茶を部活の仲間に飲んでもらえる時の嬉しさを味わったときである。当初は「早くお点前ができるようにならなければ」という気持ちでいっぱいだった。しかし、「少しでも泡のよく立ったお茶を飲んで楽しんでもらいたい」という他者への思いやりの気持ちを持つことができるようになった。茶道に対する「恐怖」というマイナスの感情から脱却し、茶道の中で体感できる楽しさや仲間への思いやりの心を学ぶことができた。



現在でも、思うようにお点前ができない時には辛さや悔しさを感じるが多々ある。しかし、そのような困難な瞬間にも、その先にある喜びを想像することで前向きな気持ちを保つことができるようになった。それに、茶道を通して学ぶことができるのは、単なる「お点前」の技術だけではない。「侘び寂び」の美意識、他者への「思いやりの気持ち」、そして「四季を楽しむ」心といった、日本人として大切な価値観を身につけることができる。それでも不安に駆られた時に心に浮かべるのは、坂静山の「怠らず 行かば千里の 末も見ん 牛の歩みの よし遅くとも」という言葉である。坂静山の言葉のように、一つずつでも着実に学び続けて、いつか立派な茶人としてお世話になった方々にお茶を差し上げることが今の私の目標である。

第一席

一碗に込める心

立命館大学3年（京都府）

田島 甘菜

私が茶道に出会ったのは、大学に入学して間もない頃の新入生歓迎茶会だった。先輩方の立ち居振る舞いは、何気ない一つひとつの所作までもが洗練されており、私の目にはとても格好よく映った。右も左も分からない新入生の私はその姿に強い憧れを抱き、「自分もあのように凛とした人になりたい」と思ったのが、茶道を始めるきっかけであった。

しかし実際に稽古を始めてみると、所作を覚えるのは想像以上に難しく、何度も同じところを指摘される自分に落ち込むことも多かった。茶筌を振る手はぎこちなく、帛紗さばきも不自然で、思い描いていたかっこよさとはほど遠いものだった。焦る気持ちのなかで、それでも続けることができたのは、茶道が「上手に見せるための技術」ではなく「相手を思う心」を形にするものだ気づいたからである。たとえ拙くても、真心をこめて一碗を差し出すことに価値があるのだと学んだとき、少し肩の力が抜けた。

大きな転機となったのは、同期の女子だけで企画した有志の茶会だった。準備の段階では道具の取り合わせや抹茶、お菓子をどうするかで意見が分かれた。しかし「お客様にどう感じていただきたいか」という視点に立ち返ると、自然と議論がまとまっていった。お互いに譲り合い、時には自分の考えを引っ込める場面もあったが、それを負担に感じることはなかった。むしろ「相手を思いやること」が私自身の成長につながっていると感じた。

迎えた当日、私は緊張で手が震えていた。けれど、お客様が笑顔で「心が安らぎました」「楽しい席でした」と声をかけてくださったとき、その言葉が胸に沁み、努力してよかったと思えた。自分の不器用さや未熟さに悩んでいた頃の私は、「失敗しないこと」にばかり意識を向けていた。しかし今は、「相手の心に何かを届けたい」という想いが自分を動かしている。茶道を通じて、私は人にどう向き合うかを学んだのだと思う。

また、茶道を続けるなかで「季節や場を感じ取る目」も育ってきた。初めの頃は会記を見てもその意味を十分に理解できず、「なぜこんなに細かくこだわるのだろう」と思ったこともあ



る。だが、季節の移ろいを道具に託し、お客様と共有すること自体が、思いやりの表現なのだと理解できるようになった。すると自然に、日常生活のなかでも花や空の色、風の匂いに目を向けるようになり、世界の見え方まで少し変わった気がする。

稽古を重ねるなかで、先生や先輩からいただいた言葉も私の成長を支えてきた。所作の細かい直しだけでなく、「慌てなくていい」「気持ちを込めれば伝わる」といった言葉は、技術的な助言を超えて、私の心を軽くしてくれた。最初は失敗を恐れるあまり周囲と比べてばかりいたが、そうした励ましを受けるうちに、自分なりの歩みの大切さを実感するようになった。人の言葉を素直に受け止め、成長の糧にできるようになったのも、茶道を通して得られた変化の一つである。

振り返れば、茶道を始めた頃の私は「かっこよくなりたい」という気持ちばかりが先走っていた。しかし今は背伸びをするよりも、真心を込めて相手と向き合うことの方が大切だと考えている。成長とは、大きく変わるのではなく、日々の小さな気付きの積み重ねなのかもしれない。

茶道にはまだまだ奥深い世界が広がっている。これからどれだけ続けても、きっと新しい学びに出会うだろう。それでも、今の私が確かに言えるのは「茶道は私を人として成長させてくれた」ということだ。この先もその学びを胸に、人との関わりのなかで少しずつ自分を磨いていきたい。

佳 作

菊込 明星 (北海道教育大学 釧路校)

野本 萌絵 (北海道教育大学 釧路校 大学院)

北條 綾香 (亜細亜大学)

高尾 咲 (桜美林大学)

加藤 綺吏斗 (豊田工業高等専門学校)

佐田 理彩子 (南山大学)

近江 陽夏 (平安女学院大学)

劉 星宏 (平安女学院大学)

宮下 智奏 (平安女学院大学)

大前 舞華 (鳥取大学医学部)



静けさは僕を走らせる

高崎市立高崎経済大学附属高等学校2年（群馬県）

松本 凜

小学生から高校に入るまで、私はサッカーを続けてきた。ボールを追いかけ、仲間と声を掛け合い、ゴールをめざして走る毎日。汗と歓声に包まれたあの時間は、間違いなく私の青春そのものだった。しかし高校に入学したとき、ふとサッカーから離れる決断をした。理由はうまく説明できない。ただ新しい世界に触れてみたいという気持ちだけだった。そうして部活動紹介の日、特に深い考えもなく「とりあえず何かに入ろう」と選んだのが茶道部だった。あの瞬間の軽い選択が、私の心を大きく揺さぶる経験につながるとは、そのとき想像もしていなかった。

初めて茶道の稽古に参加した日、私は衝撃を受けた。サッカーで慣れ親しんだ「動」の世界とは真逆の「静」の世界が広がっていた。茶碗を置く角度、歩くときの足運び、畳に座る姿勢。その一つひとつは小さな動作に見えるが、すべてに意味があり、乱れると全体の調和が崩れる。最初は窮屈で、ただの暗記のように感じられた。しかし先輩や先生が流れるように点前を行う姿を見ているうちに、小さな所作の積み重ねが一つの美しい世界をつくり出していることに気づいた。静けさの中に潜む力に、私は心を打たれた。

ある日の稽古で、手順を間違えないようにと必死になり、茶碗ばかりに意識を向けていたとき、先生がふと声をかけてくださった。「お茶は相手のために点てるものですよ」。その一言は胸に深く響いた。サッカーでは仲間のために走ることが大切だったが、どこかで自分の活躍を誇りたい気持ちもあった。茶道は違う。自分を見せる必要はなく、ただ相手を思い、一服を差し出すことに心を込める。私はその瞬間、静けさのなかにこそ、走る心の原動力があることに気づいた。

それ以来、稽古に向かう姿勢が変わった。茶碗を持つ手、茶筌を振る動作、どれも「相手を思う心」を込めることを意識するようになった。すると所作が自然と落ち着き、心も静かに整っていく。自分のためではなく、相手のために動くことが、こんなにも心を豊かにするのかと驚いた。さらに、私は「伝統をつなぐ」という自覚を持つようになった。畳の上で繰り返される所作は、何百年もの歴史の中で守られ、受け継がれてきたものだ。私が今している一挙手一投足は、過去の誰かが残し、未来へ託そうとしてきた文化の一部だと思うと、不思議な重みを感じる。私はただお茶を点てているのではなく、歴史を手渡しているのだ。その責任とは異なる重さを持っていた。そして茶道を通して、私は「人に伝える喜び」を知った。茶会に来た友人が、点前を見て「なんだか落ち着いた」と言ってくれた瞬間、胸の奥が熱くなった。派手な歓声ではない。静かな一言だった。それでも私の心が相手に届いたことを確かに感じたのだ。



現代社会は速さや効率を求める。しかし茶道は真逆に行く。ゆったりした所作や沈黙の中に、相手を思う心が息づいている。忙しい時代だからこそ、その価値は大きくなると私は思う。

振り返れば最初は軽い気持ちで始めた茶道だった。しかし今では私にとってかけがえのない居場所となった。サッカーで学んだ「動の世界」と、茶道で学んだ「静の世界」。一見正反対の二つの世界に共通していたのは「相手を思う心」だった。仲間のために走る汗の中にも、茶碗を差し出す静けさの中にも、人と人を結ぶ力がある。

静けさの中で育まれた私の心はこれからも走り続ける。茶碗に込めた一瞬一瞬の想いが誰かの胸に小さな灯をともす。その灯が重なり合い、未来への道を照らし、私たちの歩む道を開いていくことを、私はそっと信じている。

優秀賞

男子校で深める「和敬清寂」

慶應義塾志木高等学校3年（埼玉県）

圖子田 周

私は男子校に通う高校3年生である。茶道には今年初めて触れることになった。というのも、私の学校では、3年生になると開講される自由選択科目の中に「茶道」の授業があるのだ。1学年上の部活動の先輩が昨年この授業を受講しており、その存在自体は以前から知っていた。それでもやはり、学校の授業として茶道を学び、体験できることに強く興味を惹かれ、受講することにした。

授業の形式は、生徒参加型の体験授業である。お点前の所作を学びながら、自分自身で実際にお茶を点てることができる。受講し始めてからまだ4か月ほどだが、すでに多くのことを習い、感じた。その中でも、特に印象に残っているのが「和敬清寂」という言葉である。

「和敬清寂」とは、主人と客人が互いに敬意を持ち、茶庭・茶室・茶器などを清く静かに保つという意味である。また、千利休が茶の湯の精神として大切にしたい四つの教え、すなわち「和（調和）」「敬（尊敬）」「清（清浄）」「寂（静寂）」を象徴する言葉でもある。一見すると、「和敬清寂」は男子校のようなにぎやかで騒がしい環境とはかけ離れたもののように思える。しかし私は、男子校という空間だからこそ、この四つの精神はむしろ深く実感できるものだと感じている。

まず「和」。男子校では、冗談を言い合ったり、イジったりする場面が多い。けれども、本当に傷つくようなことや、触れてはいけない話題には自然と誰も踏み込まない。ふざけて笑い合っているように見えても、心の奥では相手を理解し、受け入れようとする空気がある。それは、遠慮が少ないけれど気遣いは忘れない、男子校独特の人間関係によって生まれる「和」なのだと思う。

次に「敬」。男子校では、友達同士や先生との関係がフランクになりやすい。しかしその中でも、「親しき仲にも礼儀あり」という言葉の通り、相手を軽んじない姿勢はとても大切である。



たとえば、勉強に真剣な友人をからかったり、授業中に先生を茶化したりするのは簡単だ。しかし、それをあえてしないという選択には意味がある。自分と異なる価値観や考えを持つ人を尊重する心こそ、「敬」の精神だと私は思う。

三つ目の「清」とは、心と場を整えることだ。男子校では、どうしても日常が雑然としやすい。だからこそ、自分の机をきれいに保ったり、身だしなみを整えたり、提出物を期限通りに出したりすることが、自分の内面の姿勢にもつながる。形を整えることは、心を整えること。私はそう実感している。

最後に「寂」。これは「静けさ」や「落ち着き」を意味するが、私は「流されない心」として理解している。教室がにぎやかな中で、一人で本を読んでいたりと、自分の趣味に集中していたりする生徒を見かけると、私はそれをとってもかっこいいと思う。他人に合わせるのではなく、自分のペースで立っている姿には、静かだが確かな強さがある。それこそが「寂」の本質だと感じる。

「和敬清寂」は、決して静かな茶室の中だけにあるものではない。男子校という、熱気と騒がしさに満ちた日常の中にも、確かに生きている。お互いを受け入れる「和」、人を尊重する「敬」、内外を整える「清」、そして自分らしさを貫く「寂」。茶道を通してこの四つの考えに触れたことで、私は男子校の日常にもある美しさや大切な精神に気づくことができた。

これから先も、「和敬清寂」の教えを胸に、自分とまわりを大切にしながら日々を歩んでいきたい。

優秀賞

向日葵に込めた願い

渋谷教育学園幕張高等学校3年（千葉県）

井上 紗良

私達の学校の茶道部では毎年、高校3年生がデザインを考案し和菓子屋さんに作ってもらった練り切りを文化祭のお茶会でお出しするという伝統がある。今まで先輩達が描いた絵が綺麗で美味しいお菓子に生まれ変わる様子を見てきたため、まだ1年生や2年生だった頃から、どんな案にしようかなとノートの端に落書きしてしまうくらい、とても楽しみにしていた。

そんな私が3年生を迎え考えた練り切りの銘は「向日葵」。左上から青、白、黄色と移り変わる色で、一筋の飛行機雲の走る青空、そこに浮かぶ入道雲、そしてそれらを見上げる向日葵畑という、夏の情景を表現している。太陽に向かって堂々と咲き誇る向日葵はウクライナの国花でもあり、世界の平和を願う気持ちが込められている。

学校の茶室にはないのだが、私は茶室への狭い入り口を境に武士が刀を置き、どんな人もが平等にお茶を楽しむ空間に入るためという「にじり口」の由来を知ったときに、敢えて言葉にするのではなく自然に人々を聖なる空間に誘導していく茶道の精神に魅了された。このデザインにしたのは、自分達のお茶会でこの和菓子で、お客さんを平和に満ちた世界に導く「にじり



口」としたかったからだ。

腰に刀を差していない現代人にとって、「にじり口」は人それぞれ異なるだろう。調和のとれた茶室の空間そのものかもしれないし、畳の香り、お釜でお湯の沸く音、お茶碗の触り心地、そしてお茶の味かもしれない。五感で、俗世から聖なる世界への何らかの変化を感じるはずだ。私も、その一つとなるような、口で伝えずとも人間の感覚に訴えることができるお点前ができるようにお稽古を重ねたい。

人間は生きている以上、皆、欲が生じてしまう生き物であり、それは避けられない。戦争とは決してこのような単純な理由で起こるのではないけれども、戦うことで勝ち負けを決める以外の別の道が必ずあるはずであり、それは、ひと度武器を手放して探し始めさえすれば、自ずと開けてくるものだと思う。ただ、武器を置くように言っても、その声が届くとは限らない。

茶道には人間から尖ったものを取り去る力があるとを感じる。テストの点あまり良くなくて自分を責めていたとき。クラスで友達と意見が合わなかったとき。心の中に芽生えた棘は、部活の時間を迎えて一歩茶室の空間に足を踏み入れ帛紗を腰につけると、不思議と消える。もちろん完全に無くなるのではなく、帛紗をたたみ茶室を出た後の帰り道には、また棘を感じるようになることもある。けれどもその棘は絶対に小さくなっていることに気付く。

これと同様に、茶道の精神によって、人間は武器を置くことができると私は信じている。一度きりのお茶会でお互いをいがみ合う気持ちが全て無くなるわけではないが、一度和やかな空間の中に座ってお茶を飲む機会が出来たならば、その時間だけは完全な平和がもたらされ、お茶会を終えた主人と客人は必ず、次のお茶会の約束を交わすことになるだろう。

茶道は、平和の道に繋がる道の一本ではないだろうか。

戦闘機が飛び交い、爆弾によって土煙が巻き起こり、戦火で向日葵畑の焼かれてしまう世界ではなく、観光客を乗せた飛行機が空を飛び、入道雲の立つ夏休みに海外旅行が楽しまれ、太陽の光が向日葵畑に降り注ぐ景色を、世界中の人々が見ることのできる日が来ますように。

優秀賞

バトンを繋ぐ

千葉県立清水高等学校3年（千葉県）

中村 颯来

お盆休みに家でスマホをいじっていたら、「裏千家前家元 千玄室さん逝去」というニュースが飛び込んで来た。ついにこの日が来てしまったかという気持ちだった。百歳を超えていて、失礼ながらいつながあってもおかしくない年齢だとは知っていても、それはどこか遠い未来の話のように思っていた。

私が茶道部に入部したきっかけは顧問の先生の大宗匠に関する話を読んだことだった。茶道部に入ってから、さらに勉強して大宗匠の著書も読んだ。一碗に感謝し、相客と譲り合う茶道



には、本当に平和に暮らせるヒントがたくさん詰まっている。私は三年生になり、後輩に指導することも多くなった。普段はお点前の順序ばかり教えることが多くなってしまいうけれど、ときどき感謝する意味や譲り合う意味についても、さりげなく伝えるようにしている。

大宗匠が提唱された「一盃からピースフルネスを」という言葉を、私がどれだけ理解できているのか自信はない。でも、自分なりに解釈し、それを後輩に伝えていきたい。私はもちろん大宗匠に直接お会いしたことはなかったし、お話を聞く機会もなかった。私があと十年いや五年でも早く生まれていれば、大宗匠に直にお会いして、教えを乞うことができたかもしれない。でも、それは叶わないことになってしまった。それでも私は裏千家を学ぶ者の末端の末端として、大宗匠の意思を引き継いでいきたい。

今、戦争の心配もせずに登校して、楽しく茶道部で活動できているのも、平和でなければできないこと。80年前にはそれができない時代があった。そこを乗り越えてくれた先人たちがいたからこそ、今の時代がある。世界を見渡せば、残念ながら決して平和とは言えない。高校生の私にできることは、ほんのわずかかもしれないけれども、まずは身近な人を慈しみ、譲り合い、敬い合うことから始めたい。そのきっかけは、茶道の中にたくさんあるように思える。大宗匠からバトンを渡された末端の一人として、これからも茶道を通して平和を考えて、それを実践に移していきたい。

優秀賞

型の中の自由

富山県立魚津高等学校3年（富山県）

大藏 夕菜

茶道を習い始めたばかりの頃、私はその「型」の多さに驚きました。茶碗の持ち方、帛紗のたたみ方、立ち方、座り方に至るまで、全てに決まりがあり、まるで舞台上で練られるマリオンネットのように型によって縛られていました。その一つ一つを覚えるたび、私は「なぜ、こんなに細かいのだろう」と感じていました。

けれど、ある日、「型があるからこそ、自由になれる」という小説の一節に出会いました。その時の私には、その言葉が矛盾しているように感じました。型はむしろ、自由を縛るものだと思っていたからです。しかし、その矛盾が余計に心に残り、私は調べてみることにしました。そして目にしたのは、歌舞伎役者・中村勘三郎さんの言葉です。「型があるから型破りができる。型がなければ、それはただの型無だ」。この言葉を見た瞬間、今まで感じていた疑問が、少しほどけた気がしました。そして、その意味を実感したのは、何度も稽古を重ねた後のことでした。

最初は、先生の動きをまねるだけで精一杯だったものが、身体に自然と馴染み、考えずとも手が動くようになってきた頃。決まった流れの中にもなお、心は自由になっていることに気がつきました。例えば、お点前の最中に聞こえる雨音やセミの鳴き声、抹茶の香り、客人の



佇まい。そういった細やかな変化に気づく余裕が私の中に生まれていました。型どおりに行うからこそ、自分の内側や相手の心に目を向けられる。決まりきった所作があるからこそ、その日の空気やお客様の表情といった「その瞬間だけのもの」に敏感になれる。私はようやく、あの言葉の意味を理解することができました。

また、茶道の型は、単なる作法ではなく、長い年月をかけて積み重ねられてきた美意識の結晶でもあると感じています。動きの無駄を削ぎ落とし、意味のあるものだけを残してきた先人たちの知恵。その完成された型に自分の心を重ねていくことは、まるで先人と対話しているような、不思議な感覚に襲われます。自由とは、好き勝手に動くことではなく、型の中に自分の心をどう重ねるかにある。決まりを学び、守ることで初めて見えてくる世界があります。

今でも私は、お点前の前に小さな緊張を覚えます。それでも、静かに呼吸し、茶碗を手に取り、決められた型の中で、意識せずにゆったりと自然に体が動く自分がいます。型を学び、自分のものにするには自由を手にするために欠かせないこと。それは茶道に限らず、何かを真剣に学ぶ全ての場面に通じる考えのように思われます。その感覚を将来の仕事や人との関わりに活かしていきたいと思います。

優秀賞

余白

山梨県立吉田高等学校3年（山梨県）

天野 ひより

夏の午後。人気のない作法室に、ひとり。日々の焦燥感から逃げるように、私はいつもこの場所へ来る。私はひとり、帛紗をさばき、ひとりでお点前を始める。蒸し暑さに耐えきれず窓を開けると、夏の風が畳をなでた。遠くから、運動部の掛け声や吹奏楽部の演奏が聞こえてくる。うだるような日差しの中、外の世界はせわしなく動き続けているのに、この小さな空間だけは、時計の針さえも息を潜めているかのようだった。

茶杓を手に取り、静かに清める。柄杓から茶碗へお湯を落とす。小さな音と湯気が立ちのぼり、そこに集中していると、不思議と心が落ち着いていく。茶筌でお茶を点てる動作は、いつもの手順のはずなのに、そのひとつひとつが私を「今」ここへ引き戻す。少し緊張した指先を見つめながら、私はその感覚を味わった。外の喧騒も薄れていき、静かな時間の中で、初めて私の心は息をした。

けれどもふと、点てたお茶を前にして、私は気がついた。目の前に置かれたその一碗。その湯気の漂う先には、誰もいない。本来、茶道はお客さんがいてこそ成り立つもの。このお茶を点てる所作は、すべて相手に心を尽くすためのものだ。それなのに、ここには相手がいらない。私はひとりでお茶を点て、ひとりでそれをいただく。そのとき感じたのは、少しの苦みと、胸に広がる寂しさだった。

しかし、その寂しさこそが私に気づきを与えてくれた。焦りや不安に追われているとき、私



は自分のことで精一杯で、相手のことまで考える余裕など持てなかった。けれども、静かにお点前を繰り返す中で、心に「余白」が生まれた。そして初めて、そのことに気がついた。茶道は、決してひとりで完結するものではない。心に「余白」があって初めて、相手を思いやる気持ちが芽生え、所作に込める意味を理解できるのだと知った。

この体験は、私の生き方そのものを映し出していたのかもしれない。私はこれまで、結果を追い求めることに必死で、つねに走り続けていた。努力すること自体は大切だが、余裕を失ってしまうと、視野が狭まり、自分の変化にも他人の気持ちにも気づけなくなる。お点前の時間の中で心が落ち着いたとき、私は「余白」の存在に気づき、その「余白」があってこそ本当に相手と、自分と、向き合えるのだと実感した。

思えば、茶道の稽古の中で先生が言っていたことは、いつも「相手を思う心」だった。棗や茶碗を丁寧に扱うのも、相手に心地よい時間と空間を届けたいからである。だが、私は頭で理解してただけで、その意味を心で感じることはできていなかった。ひとりで畳の上に座り、寂しさと一緒にお茶を飲み込んだとき、やっとその言葉のもつ重みを理解できたのだと思う。

この3年間、茶道は私に多くのことを教えてくれた。所作の美しさや伝統の重みだけではない。焦りの中で見失いがちな「余白」を取り戻すこと。相手のために心を尽くすこと。その二つがあってこそ、茶道は茶道として生きるのだ。そしてそれは、私の生き方にも大きく影響した。結果を追い求めて走ることも大切だが、心に「余白」を持てば、変化を受け入れる柔軟さや、人を思いやる視点が生まれる。その積み重ねが、自分の成長につながっていくのだと実感している。

これからの人生でも、きっと私は夢や目標に向かって走り続けるだろう。壁にぶつかり、焦りに心を締めつけられる日もあるかもしれない。そんなとき、茶道が教えてくれた「余白」を思い出したい。ほんの少し立ち止まり、自分と向き合う時間をつくることで、相手ともしっかりと向き合える自分でありたい。茶道で学んだ「余白」の大切さを胸に、これからも一歩ずつ進んでいきたい。

優秀賞

思いやりをもって

静岡県立三島北高等学校2年（静岡県）

小澤 想葉花

茶道をする上で本当に大切なことは何か。高校で茶道部に入るまで考えたこともなかった。

私は小学校1年生の時に茶道を始めた。自分でやりたいとは言ったものの、それはほとんど私の曾祖母が喜ぶだろうと思ったからだった。私の親戚は茶道の経験者ばかりだったが、特に曾祖母は師範をしていて、家に遊びに行くたびにお菓子とお抹茶を出してくれた。そんな曾祖母を喜ばせたいという軽い気持ちで始めた茶道だったが、意外にも私は茶道の世界に引き込まれていった。やっていくうちに「茶道」というもの自体が楽しくて仕方がないように思えた。



その経験から、高校に上がった私は何の迷いもなく茶道部に入部した。入部したての4月、茶道の経験者はいますか、と先生に聞かれ、手を挙げた私はすぐに他の部員からわからないところを質問されるようになった。ほとんどの部員が初心者だったため、先生に言われたことを私だけができているということも度々あり、いつの間にか私は他の部員に教える立場になっていた。たくさんの人に頼りにされているのが嬉しいと思った反面、このことばがふと頭の中に浮かんだ。「他人をあなたなどることなく、いつも思いやりが先にたつように」。お稽古開始の合図と共に唱えるこのことばの意味を真剣に考えたのは、この時が初めてだった。私は、心のどこかで他の人よりできる自分に酔っていたのだと気づいた。他の人に教えてあげることが思いやりだと勘違いし、思いあがっていた自分に嫌気がさした。と同時に曾祖母の顔が頭に浮かんだ。曾祖母は常に人に教える立場にあったが、「人をあなたなど」ということを絶対にしなかった。

高校で茶道部に入るまで、私は先生と二人きりでのお稽古しかしたことがなかった。仲間と切磋琢磨してお稽古に励んだことがなかった。茶道で本当に大切だったのは個人の技能ではなく、共にお稽古に励む者を思いやる利他心だと気付かされた。

その事実気付いてから、今まで自分のできていなかった部分が見え始めた。そして、それを仲間と共有していくうちに自分のお点前が良くなっていくのがわかった。そのうち、一緒に練習する仲間だけではなく、いつも指導してくださる先生方や顧問の先生に対しても思いやりの心で接するようになった。それによって私の心にも自然とゆとりが生まれ、お道具を丁寧に扱えたり、先生方に感謝の気持ちを伝えたりすることができた。思いやりの心を持つことで人と人との関わりの輪が広がっていく。茶道を通してそんな大切なことに気付いた。今の学校で茶道はあと1年もできないが、残りの時間も思いやりの心を持ってお稽古し、その輪をもっともっと広げていきたい。

優秀賞

一期一会を味わう—花びら餅とともに—

滝高等学校1年（愛知県）

卯田 彩乃

我が家には小さな茶室があり、毎年お正月には初釜を行うのが恒例になっている。掛け軸が掛け替えられ、床の間には紅白の花が生けられ、茶室全体が新しい年を迎える喜びに包まれる。子どもながらにその空間は特別で、「お正月が来た」という実感を与えてくれた。

そのとき、必ず曾祖母が口にする言葉があった。「ああ、今年も花びら餅が食べられるね」。曾祖母は花びら餅が好物で、初釜の日には目を輝かせて待っていた。白い餅に紅色が透け、ほんのり甘い味噌あんごぼうの香りが口の中に広がるその菓子を、曾祖母は「1年の始まりの味」と表現していた。私は抹茶の苦さが苦手だったが、曾祖母がうれしそうに花びら餅をほおばる姿を見て、子ども心に「お茶の時間は特別なんだ」と感じたことを、今でも懐かしく思い出す。



しかし、数年前に曾祖母は亡くなった。翌年の初釜には、いつも通り花びら餅が並んでいたが、それを前に「おいしいね」と笑う曾祖母の声はもう聞こえない。花びら餅を口にした瞬間、甘さと香りとともに、曾祖母と過ごした数々の正月の光景が一気によみがえり、涙が止まらなかった。花びら餅は単なるお菓子ではなく、私にとって曾祖母との思い出をつなぐ大切な象徴になっていたのだ。

そんな背景もあって、私は茶道に強く惹かれるようになったのだと思う。中高一貫校に入学し迷わず茶道部に入りたいと思ったが、入部できるのは高校生からだを知り、いつしか茶室に座る自分を思い描いていた。そしてようやく高校生になり、念願の茶道部に入部。顧問の先生や先輩方が温かく迎えてくださり、茶室に漂う静かな空気も心地よくて、安心してお稽古に臨むことができた。

お稽古を重ねるうちに、お点前の一つ一つに深い意味が込められていることを知り、驚かされた。茶碗を清める動作一つにも「相手に清らかなものを差し上げたい」という心が隠れている。初めてのお点前は手が震えるほど緊張したが、先生から「上手だよ」と声をかけてもらい、背筋が伸びたことを覚えている。私は幼い頃から書道も続けているが、茶道は書道とはまた少し違う。書道が一人で筆と向き合い心を落ち着けるものだとすれば、茶道は人と向き合いながら自分を整えていく時間である。日常生活から少し離れ、茶室だからこそ感じられる静けさの中で集中できるのが、私にとっての茶道の魅力だ。

やがて、和菓子と抹茶の組み合わせにも心を動かされるようになった。抹茶のほろ苦さと和菓子の優しい甘さが互いを引き立て合い、一つの調和を生み出していることに気づいた。その調和は、人と人との関わりにも似ていると思う。互いを思いやり、引き立て合うことでこそ、一つの時間が豊かになるのだ。

そして、茶道はまさしく「一期一会」だと実感する。お稽古やお茶会の場に集まった人々と同じ時を共有できるのは、一度きりのかけがえのない機会だ。そのことを意識すると、日常の友人や先生との何気ない出会いさえ、もっと大切にしたいと思うようになった。曾祖母と並んで花びら餅を食べたあの時間も、今思えば、二度と戻らない一期一会だったのだ。曾祖母が「やっぱりお正月はこれだね」と微笑んでいた姿を思い出すと、茶道の持つ温かさと人を結びつける力を改めて感じる。だからこそ私は、これからも花びら餅を口にするたびに曾祖母を思い出さだろう。曾祖母の分まで茶道を続けていきたいと強く思う。

茶道を通じて学んだ「心を整える時間」と「人を思う姿勢」は、私の生活を豊かにしてくれる宝物である。これからの学校生活でも、人との関わりを大切に、一期一会の精神を忘れずに過ごしていきたい。そしていつの日か、曾祖母がそうであったように、誰かと花びら餅を分かち合いながら「やっぱりお正月はこれだね」と微笑む自分でありたい。その瞬間こそ、私は一期一会を味わっているのだと思う。



静けさの中で見つけたもの

飯塚市立飯塚第一中学校3年（福岡県）

堤 寿咲

静かな茶室で一服のお茶を口に含んだ時、私は「静けさ」というものの中に温かさがあることに初めて気づかされた。それまでの私は、静けさはどこか退屈で、間を持って余すものだと思い込んでいた。けれど、その時感じたのは、誰にも邪魔されず、ただ自分の呼吸と湯の音、茶の香りにだけ意識を向ける心地よさだった。同時に普段の生活の中でも、そんなふうに自分の感覚だけに意識を向ける機会がいかに少なかったのかを思い知らされた。

茶道の精神とされる「和敬清寂」。調和と敬意、清らかさと静けさを大切にする心は、茶室の隅々に息づいている。初めて茶室に足を踏み入れた日、障子越しの淡い光と畳の香りが静かに漂う中、私は自然と背筋を正し、静かな呼吸を意識した。誰もが余計な言葉を挟まず、目の前の茶碗と向き合う。初対面の相手ですら何故か互いに心が通じ合うような、柔らかな空気に満たされていた。

茶碗を手に取ると、ほんの僅かな重みと手に馴染む温かさが伝わる。その一つ一つに作り手の思いが込められていると知り、私は自然とその茶碗に敬意を抱いた。普段の生活では何かを大切に扱うことの意味を意識することさえ少なくなっていたことに気づかされた。いつもは慌ただしく物を扱う自分が、ここではゆっくりと手を動かし、物に触れる。その丁寧さが、自分の心をも落ち着かせていくのを感じた。僅かな動作の一つ一つに、自分の心が映し出されるようだった。

また、茶室の掃き掃除や道具の手入れも欠かせない作法の一つだ。畳の目に沿って静かに雑巾を動かしていると、不思議と自分の心のざわつきまでが静まっていくようだった。誰かに見せるためではなく、自分の内面を整えるための行為であり、その潔さに、私は新鮮な驚きを感じた。何気ない動作の中に心を鎮める力があることに気づき、日常にもそうした時間を持つことの大切さを感じた。日々、スマートフォンやSNSに振り回され、常に忙しく、次の予定や通知ばかりを追いかける生活の中で、物を丁寧に扱い、静かに呼吸を整える時間が、こんなにも心を軽くするとは思わなかった。

そして何より、茶室の静けさは、今の生活ではなかなか味わえない特別なものだった。常に音や情報に囲まれている現代において、静寂は貴重だ。茶道のひとつときは、私にとって「心の避難所」だった。静かな空間の中で、何も考えず、ただお茶を点て、湯の音に耳を澄ませる。すると、心のざわめきがすっと消えていく。その瞬間、私はようやく自分の心と向きあうことができたのだ。

この体験を通して私は、静けさこそが心を潤すのだと知った。茶道の所作のすべてが意味を持ち、心の調和を保ってくれる。それは決して茶室だけのものではない。慌ただしい日々の中にも、静かな時間と丁寧な心配りを持つことで、私達はもっと穏やかに生きられるのではないか。ふと空を見上げ、湯気の立ち上る湯呑みを手にするような、そんなささやかな静けさの時



間こそ、現代の私達に必要なのだと、今は強く感じている。忙しさに流されがちな現代だからこそ、そうした時間を意識的に持っていきたい。



先輩になるまでの一年間

北海道芽室高等学校2年（北海道）

川東 暖奈

茶道といえば、京都。私は、京都と言えば、お寺や神社を思い浮かべる。お茶はもちろんのこと、伝統的な風景、そして座禅。邪念が入ると背を叩かれる修行のひとつ。

さて、何故そのような話から始めたのかと言うと、私が最初に抱いていた茶道のイメージは、まさに座禅のような「厳しさ」だったからだ。作法を間違えると怒られる。完璧なパフォーマンスを求められる。それが、私の「茶道」のイメージだった。体験入部で作法室に入る時も「私語一つ許されない」と思っていた。しかし、部室まで案内してくれた人は意外にも、同じ中学出身の先輩だった。思い出を交えつつ、お茶をいただきながら談笑したことで、すぐに私の中の偏見は打ち解けた。とはいえ、茶道で使われる言葉は未知のものばかりだった。入部して1年が経つが、茶道を説明するのは難しく、まだまだ理解できていない部分があると感じる。

茶道を始めたばかりの頃、私は完璧にやらなければならないと思い、常に「周りより劣っているのではないか」、「私に茶道をする資格があるのか」と思い悩んでいた。そんな時に訪れた試練が、初めてのお点前だった。練習時間が足りず、不安のまま本番を迎えた。お点前が始まり、私は茶碗を清め忘れるという凡ミスをしてしまった。しかも、それに気がついたのは、抹茶を茶碗に入れた時。お客様にそのことを言わないのは失礼と思い、恐る恐る声にした時、涙が溢れそうになったのを今でも覚えている。

心の中で、「やっぱり茶道に向いていない」。「練習の時に出来ていたはず。練習が足りなかったから」と言い訳にするな。「他の人だったら出来たのかもしれない」と、水屋で何度も何度も自分のことを責めていると、顧問の先生や先輩は口々に「大丈夫、出来ていたよ」と励ましてくれた。そして、外部講師の先生はこう言ってくれた。「一番大事なのはね、心を込めてお茶を点てることなんだよ。お茶、美味しかったよ」。その時、自分が気を張り、完璧に固執していたことによりやく気がついた。私の中の茶道が「一つの競技・演目」から「人と人との関わりを繋げるもの」になった瞬間だった。

今でも自分に対する否定的な感情は沢山ある。お茶をこぼしたり、火傷をしたり、茶道部が一番困らせてしまっているのは自分だと思っている。しかし、そのような時でも、先輩や同級生、先生方がフォローをしてくれる。これからは後輩が入部し、先輩が引退すれば自分たちの学年のみが彼らの先輩になってしまう。彼らはきっと「茶道は怖い。厳しい」と思っているだろう。もしかしたら、自分のように「向いていない」と思う人もいるかもしれない。その時、私は彼らを支えられるだろうか。いや、なってみせる。完璧ではないからこそ、私に出来ることがあるはずだから。



一碗に込める思い

宮城県仙台二華高等学校2年（宮城県）

原田 葉

2年前、文化祭で初めて茶道部のお茶会に参加した。茶道について何も知らないのに正客になってとても緊張したが、その時から私はすっかり茶道に心を奪われてしまった。目の前で点てていただいたお茶を飲むと、緊張を忘れてとても幸せな気持ちになった。お点前を披露していた先輩の美しい帛紗捌きがまるで手品のようだと感じたことが忘れられず、半年後の高校生活の始まりと共に、私は茶道部に入った。

入部してからは、茶道部の活動が学校生活の中で一番の楽しみとなった。時間がゆっくりと流れる茶室で金曜日の放課後を過ごすことで、自然と気持ちが穏やかになるのを感じた。お茶や季節のお菓子をいただくことだけではなく、先生がお道具やお花、お軸などの茶道にまつわるお話をしてくださる時間を日々心待ちにしていた。

そして高校2年生になってからは茶道部の部長となり、日々のお稽古とともに文化祭の準備も始まった。会議に出席したり、書類を提出したり、予約表や資料を作成するなど、いわゆる裏方のお仕事が多くなった。今年は新たな試みとして、部員の皆で協力してお作法やお道具についてのしおりも作成した。お客様に少しでもお茶会を楽しんでもらいたいと思うと、自然と背筋が伸びるような思いになり、疲れも吹き飛ばすように感じた。

そして迎えた文化祭当日。亭主として茶席に入ると、正客には緊張した面持ちの父がいる。2年前に憧れた帛紗捌きは、入部してから何度も練習を重ねてきた。日頃の感謝の気持ちを込めて父のために点てたお茶は、これまでの茶道人生の中で一番上手に点てられたように思う。お茶会が終わってから、父から「美味しかったよ」と言ってもらえたときには、とても嬉しい気持ちになった。また他のお客様から、「お作法のしおりを見て、今までで一番お茶会を楽しめました」と声を掛けていただいたときには、作ってよかったと思うと同時に、どんなことにも思い遣りの心が大切なのだと実感した。一碗のお茶と思い遣りの心を通して、お客様の心も私たちの心も温かくなっていることに気付いた。

私はこれからもずっと茶道を続けていきたいと思っている。帛紗捌きに憧れたときの初心と、思い遣りの心を忘れずにお稽古に励み、茶道をたくさんの人に楽しんでもらいたいという思いを込めてお茶を点てていきたい。



時代と茶道のギャップ

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校5年（群馬県）

小林 洸

私が茶道に対して抱く不思議な点は「すべてが指導者次第である」という点だ。ビギナーの私達にとって、指導者に教えてもらった作法こそが茶道そのものであると思わざるを得ない。茶道というものが無形文化である以上、継承する人がいない限り廃れて消えてしまうだろう。現代人のライフスタイルでは、茶道のように時間と手間をかける文化が西洋の効率化と利便性を重視した文化に押され、存在感を失ってしまう可能性もある。

このとき、茶道の指導者はどうあるべきなのだろうか。型を忠実に厳しく教えるのか、その時代に応じて柔軟に作法を変化させていくべきなのか。それはすべて指導者の判断に委ねられている。

一つの方法である「厳格に指導する方法」は、茶道の作法が着実に身につくものの、初心者にとっては早くお菓子を食べさせてくれないかと言わんばかりの耐え難いものになりうるだろう。もう一つでは、作法より楽しさを優先するだけで終わってしまい、いざお茶会などの表舞台に出向いた矢先には、恥晒しになりかねない。果たしてどのような指導者がこのジレンマを乗り越えるのだろうか。

私が経験した茶道は、厳格さを持ち合わせた上に時代を迎合しているハイブリット型の教え方であった。作法については学生に対して求めるレベル以上のものを追求してくることもあるが、正座をお点前の15分強ずっと強要してくることはない。正客の場合などを除き、次客以降の立場になると、やはり15分間ずっと正座というのは茶道に興味で始めた初心者の学生には耐え難い。この配慮のある行為こそ、今この時に茶道を学生に教えるという指導者にとって手本とするべき姿なのだろう。

私は学校の研修でマレーシアに行き、その研修の文化交流の一環で盆略点前と軽なお茶点で体験コーナーを企画し、実施した。すると文化交流イベントの中で一番の盛況だったといっても過言ではないくらいの盛り上がりを見せた。また現地の人に「茶道の道具なんてマレーシアでは買えないし、作法を知っている人なんて誰もいないから、ここで経験できてとても嬉しいわ!」と言われ、私は茶道が日本文化を代表する存在のうちの一つになっていることを実感した。この茶道のグローバル化から茶道を継承していくためには、やはり指導者が変わっていかなければならないと思い直した。茶道の作法を変えるのはどうかという視点もあるが、茶道は作法を通して、型を守りながら心を伝える文化として存在する必要がある、本来の精神性である「一期一会」、「和敬清寂」を伝えるために継承され続けるべきである。これからの茶道を想像すると、若者や初心者に対して開かれた存在であり、私がマレーシアで体験したかのように国際的な橋渡しとしてあるべきだ。さらに今もなお発展を続けているVRなどの最新テクノロジーとの共生していくことで、時代に順応した日本人として残していきたい茶道を残し続けることができるだろう。



私は茶道の指導者に対する依存性が、別の視点で考えると全てがその指導者次第であるという、文化の継承を左右する重要な鍵だと考える。それは無形なゆえに不安定であると同時に、可能性に満ちているものだ。

第一席

飲むように

慶應義塾志木高等学校3年（埼玉県）

高瀬 岳

私は茶道を通して水の繊細さを知った。茶道という一連の流れの中でお茶を飲むと、水がのどを流れるのがよくわかる。それはあまりにもやさしい流れだった。あまりにも優雅かつ変幻自在なため、まるで水がだんだんと私の一部になっていくようだった。水がこんなにも複雑な私ののどに形を合わせて流れていくことに私は感動した。

しかし、これは裏返せば水は形が変わりやすいということでもある。その事実はあまりにも優しすぎて私は逆に傷つけられた。水はこんなにも私に形を合わせてくれているのに、私は水に形を変えることを強制していく。そんな私と水とのギャップがとても悲しかった。水を飲むたびにまるで私が水をいじめているかのように思えた。

この、たまらなく美しい溝を少しでも埋めようと、私は少しでも水のように自分から寄り添える人間になろうと思った。しかし、あまりにもそれは困難だった。どうしても私のプライドが邪魔をするのだ。私はなくしたいのになくせない。「そうなのだ。きっとこれは人間でいるための最低限のプライドなのだ」。人間に生まれた私を何度も責めた。

そんな悲壮感に明け暮れていた時、私が注目したのが茶葉だった。水は果たして茶葉をどんな風に受け取っているのだろうか。私はこの時初めて自分の受け取っている事実と他人の受け取っている事実を重ね合わせた。そうすると、まるで茶葉のようにすべてのものが水に溶けていくことが分かった。どんな偉大な事実だっていつかは風化する。そう思うと今起きているすべてのことがどうでもよく思えた。

それから私は過去を振り返ることをやめた。すると自分の過ぎていった過去がどんどん即座に消えていく感じがした。このように書くと、過去を失ってしまっている可哀想な人のように思える。しかし、その過去の喪失に対する虚しさは私は全く感じなかった。おそらく、その過去に匹敵する「白紙の未来」が常に見えていたからだ。

次の授業の日。私は感謝を伝えに宇治抹茶にお湯を入れた。すると、初めのころよりも水が緑色に変わっていくのがはっきりと分かった。まるで「今の私」に変わる過程を見ているようだった。

それは、私が水のように自ら寄り添う人間に変わったことを証明してくれているみたいだった。



茶室へ

慶應義塾志木高等学校3年（埼玉県）

渡邊 安里

昼休みの終わり、僕は弁当を詰め込みながら頭の中で次の行動をシミュレーションする。弁当を結び、保冷袋に入れ、リュックにしまい、教科書を出し、そうして頭に形成された手順を再生して身体に落とし込む。リュックを肩にかけ、教室を出て足を速めたとき思わず口からこぼれる。「次は捌きなおして…」と。自分の口が呟いた突拍子もない言葉が自分でもおかしくて笑みがこぼれる。「おっと、時間がないんだっ」。足の回転をさらに速くしつつ、今度は頭の中で呟いた。

階段を駆け足で降りて最後の3段を跳ばし踊場へ、それを何度か繰り返す。途中、友達とすれ違う。怪訝そうにこちらに振り向く彼に少し動揺したが、数秒考えてから「お茶っ」と僕が叫ぶと彼は納得したようで、上へ消えていった。イレギュラーが発生したが脳内の手順はくるってはいない。目的地は茶室だ。別棟である光彩館の1階にあるそれは3年前に新設されたものであり、3年生が選択授業で使っている。僕も最高学年になった半年前にこの茶室を使い始めた。

「扉を引いてっ」と。そうして日の下に身を投げた僕は、遠くで微かに、けれど確かに聞こえる蝉の声援に、聞こえないふりをしながら渡り廊下に沿って早歩きを再開する。頭上にある大きな蜘蛛の巣にぎょっとしながらも歩みを止めない。左に曲がる。3段の階段を1足でのぼる。手すりに身体をかがめる。視界の端に桃の木がかまってほしそうにこちらへ手を振るが、心を鬼にしてそれを無視する。

光彩館の入り口に着き、勢いよく扉を横に引く。しかし扉はびくともしない。右往左往していると、後ろにいた生徒が扉を押して開けてくれた。押戸だった。恥ずかしさを隠すように彼に感謝を述べる。彼も同じ裏千家茶道の授業を取っているが、さして親しい間柄ではなかった。今日は彼に正客を頼んでみよう。そう決意した僕はリュックを準備教室の机に置き、道具を取り出しながら自分が彼を誘っている姿をイメージした。うまく再生できるだろうか、そんな疑問が生まれたが、きっと僕なら大丈夫だろう。授業の前にトイレに行く。これは僕の日課で、どんなに急いでいても必ずトイレに行くようにしている。決して欠かすことのできない手順ともいえるだろう。用を足し、手を洗いほんの少し髪を整える。そうして、教室に戻り白地の靴下に履き替える。日焼けした黒い足の色が落ちていくさまは、まるでこれから違う世界に踏み入れるこの足を清めているようなそんな心地がした。

教室を出て数歩先の茶室の入り口の目前で足を止める。日をたっぷり吸いこんだ木の香りに鼻をくすぐられながら、目を閉じて思いを巡らす。裏千家茶道に触れているいろいろなことを学んだ。例えば、他者に感謝を欠かさないこと。客への感謝、亭主への感謝、道具への感謝。感謝の精神が背骨のように茶道の中心にあると僕は思う。他にも、盆略点前などの手順の緻密さ。一つ一つの行動に深い意味があって、それを何年も何年も大事に保管していることに尊さを感じ



じる。自分から行動するのが苦手な僕は、半年前に始まった茶道の授業をヒントにして自分の頭の中で少し先の行動のレコード、いわば手順書を作るようになった。そうすることで今までためらっていた行動を思い切って行えるようになった。もちろんレコードが接触不良をおこすこともあったが、変な音を出しながらも最後まで音を紡いだ。できなかったことができるようになる。それは僕の大きな自信になった。その自信は間違いなく茶道が僕に与えてくれたものだ。この半年の間で木曜の5・6限のこの時間は僕に多くの宝物を与えてくれた。

木の香りがする。そうして長い思考の旅を終えた僕は眼前の木の扉を見る。「今度は引き戸だ。間違いない。」そう呟いて戸を引き、足早に茶室へはいった。新たな宝物を得るために。

第一席

私は今も茶道をしている

東洋英和女学院高等部2年（東京都）

織田 愛梨

お点前をしなくなって、もうしばらく経つ。立礼のお点前のお稽古は、もう久しくしていない。

私が部長として茶道部を回していかなければならなくなったのは、今年の4月、花冷えの季節からだ。中高一貫のため、5年目になった茶道部も、今年で引退する。それまで私は中学1年生から茶道部に入り、自分なりの研鑽を積み、茶道に触れてきた。中学1年生のとき、部活動に慣れるのに必死だった。中学2年生のとき、後輩ができて嬉しかった。中学3年生のとき、初めて半東として文化祭に出た。高校1年生のとき、お点前としてお客様にお茶をお出しした。高校2年生になって、先輩が引退なさったあと、今度は私たちの学年が部を率いていくことになった。

部長になった当初、これからは私たちが部活を回していかなければいけないという責任が、双肩にのしかかるのを感じた。そしてすぐに、今まで全く知らなかった仕事をしなければならなくなった。お稽古の日程や持ち物確認、先生方との情報共有、当番決め、部屋割り決め、書類作成というように、見えなかった仕事が一気に押し寄せた。お稽古が回っていない後輩や同輩にも気を配らなければならない。自分のお稽古に割く時間はなく、部活動の時間内に終わらせられるようにするだけで精一杯だった。

果たして自分は茶道をしているのか、運営をしているのか、どちらなのだろうと思うことが増えていった。帛紗の感触が好きだった。茶筌でお茶を点てる時のサラサラとした心地が好きだった。でも今は、帛紗の代わりにパソコンを触り、書類を作り、時間通りに進んでいるか、お稽古中も部屋を行き来して動き回っている。私の憧れた茶道は何だったのだろう。急いで走り回るのか。それともお稽古をしている後輩や同輩のために、汗を流すことか。

やっぱり違うよねえ、と母に愚痴を言ったのは6月頃だった。紫陽花に露が落ちるのを見ながら、ぼんやりと私は言った。そうよねえ、と母はのんびりと答えた。



「今度はあんたが、支える番になったんやね」

そのとき、目から鱗が落ちた。何気ないふうを装って、そうかもね、と返したが、胸の中に風穴が空いた気分だった。支える番。番、という言葉が、すんと胸に落ちた。そう、番、番なのだ。今までだって、だれかが支えてくれたから、私が帛紗に触れられた。お茶を点てて、お稽古に参加して、茶道を続けていられたのだ。そうやって脈々と受け継がれてきた、渡されてきたバトンが、ようやく私に巡ってきただけのことだ。

私の学校には、恩送りという言葉がある。恩返しではなく、恩送り。先人から与えられたものを、返すのではなく次の人に同じように送りなさい、というものだ。私は今まさに、それをしている。私がもらったものを、与えている。そう思うと、これは今まで習ってきたおもてなしの心と何も変わらないと気づく。ただ誰かのためを思って、自分にできる最大限のおもてなしをする。たとえ自分が、その手でお茶を点てていなくても。

今日も今日とて汗を流す。運動が何よりも嫌いな私が、走り回っている。書類はどんどん増えていく。それは帛紗を畳むわけではないし、お茶を点てることでもない。しかし今になって、私はやっと胸を張って言える。キーボードを打つのが速くなった。書類作りが上手になった。それは、一見茶道とは何も関係がないことのように思える。私は確かに畳に座していない。私は確かにお稽古をしていない。でも、言える。自信を持って言える。私は今も茶道をしている。

第一席

僕の高校生活を変えたもの

大成高等学校2年（東京都）

坂間 天音

学校に行きたくない。別に楽しいことがないわけではない。しかし何か頑張りたいと思えるものもない。退屈だった。入学したての僕は高校で部活に入る気はなかった。運動部は練習が大変。文化部には入ったことがなかったから特に入りたいたいと思わなかった。ずっと家でだらだらしながら時間を潰す日々を過ごした。

僕の高校では二者面談がある。入学して半年ほど経ったとき、そこで先生に「入りたい部活がないなら茶道部に体験入部にきなよ」と勧められた。担任の先生は茶道部の顧問だった。気は向かなかった。僕は和菓子とお茶がもともと好きだった。だから体験入部に足を運んだ。

初対面の人とあまりうまく話せない僕は、自分の心臓の音で周りの音があまり聞こえないほど緊張していた。呼吸をできる限り整え、茶室に入った。第一印象は中学の修学旅行で行った旅館の一室みたいで悪くなかった。がちがちに緊張した僕の表情はこわばっていたかもしれない。そんな僕を茶道部の先輩方は笑顔で迎えてくれた。まず帛紗の扱い方や道具の説明をもらった。初めての帛紗。僕は苦戦した。布を適当な幅で折りたたむことがこれほどまで難しいものだとは想像もしていなかった。先輩の手本は美しかった。この動作を何百回やっているのだろうか。こんな風に自分ができるとは思えなかった。しかし時間が経つにつれ僕の緊張は



ほぐれていった。初めて感じる緩やかだが集中力に満たされた空気。先生や先輩の美しく華やかな動作。僕は圧倒されてしまった。

僕は入部した。こんな風になりたい。高校に入って初めて目標ができた。嬉しかった。入学してから今までずっと魂の抜けたように生きていた僕に光が見えたのだ。正式に入部して人生で初めてお茶をたてた。泡は荒く、茶筌で点て残した粉が底に沈んでいた。自分で飲んでみてもまろやかさなんてものはなく、下の方にまだ粉が残っている状態であった。正直落ち込んだ。お点前は一回覚えても次部活に行った時には半分ほど忘れてしまっていた。そんな僕に先生や先輩は何度も優しく丁寧に指導してくれた。

何回か部活に参加し、準備などにも慣れてきたとき、僕は自分でもわかるほどに生き生きしていた。僕の高校生活が茶道のおかげで変わった。2年生になるまでに茶道の基本的な動きを身に付け、指先まで意識を巡らせることができるようにした。そして今僕は文化祭に向けて御園棚でのお点前を稽古している。

僕は茶道部に入り作法や生きていくうえで欠かせない礼儀や忍耐力、心の落ち着きを学ぶことができた。今では部活に行くのが楽しみである。生気がなかった僕を救ってくれた茶道。そして先輩や先生に感謝している。これからも茶道に励み、何か恩返しをしたいと思っている。

第一席

茶道とサッカーの共通点

横浜市立小田中学校2年（神奈川県）

鵜名山 日花里

私は、茶道部に入りながら、小学校2年生から続けていたサッカーを習い事ですしています。このことを友達や先生に言うと「茶道とサッカーって真逆だね」とよく言われます。私も最初はそう思っていました。でも、1年間茶道に触れてきて、茶道とサッカーって実はいくつか共通点があるのではないかと思うようになりました。

私が思う一つ目の共通点は、礼儀を大切にしているところです。サッカーでは、試合の始めと終わりに、ベンチと見てくれている人にお辞儀をし、相手選手、審判と握手をします。これは審判や相手チームへの敬意、フェアプレー精神などの礼儀を大切にしているからこそ行なっていることだと私は思います。茶道では、お点前の始めと終わりや、点ててもらったお茶をいただくとき、道具を片付け始めるときなどにお辞儀をします。またお辞儀には「真・行・草」の3種類あり、状況に応じて使い分けます。これは、お客さんをおもてなしする心を持っているからこそ行なっているのだと私は思います。

二つ目の共通点は、集中力、精神力が必要なところです。サッカーは、プロの選手でも一試合90分の中でボールに触っている時間はたったの2分とされています。だからこそ、味方へのパスを正確に出したり、ボールを持っていない時でも相手や味方の動きをよく見ることがとても大切です。そして、これらは集中力がないとできないことだと思います。また、PKなどの



緊張する場面でプレッシャーに打ち勝つ精神力も、サッカーには欠かせないことだと私は思います。茶道では、最初から最後まで、一つ一つの所作を正確に美しく行うことにとっても集中力が必要です。そして、お客さんの視線を浴びながらも、心を落ち着かせる精神力も茶道には必要だと思います。

三つ目の共通点は、美しさを追求しているところです。サッカーの美しいところは、選手同士息を合わせ、華麗なプレーで相手の守備を崩していくところにあると思います。茶道では、帛紗の捌き方や、道具の配置など、お点前一つ一つの動作に美しさを求めます。そして、サッカーと茶道どちらの美しさも、見ている人の心を動かす力があると私は思います。私が教わっている茶道の先生は、一つのお点前の流れを一通り覚えることができたなら、茶碗を持つ位置や茶杓を清めるときの茶杓の向き、帛紗を捌くときの手の位置など細かいところをたくさん指摘してくれます。初めの頃はお点前を覚えることだけを考えていましたが、最近は先生から教わったことを思い出しながら、美しさを求めてお点前するようになりました。

この1年で見つけた共通点を、私はいろんな人に伝えていき、両方の魅力をたくさんの人に知ってもらいたいです。サッカーで学んだことを茶道に、茶道で学んだことをサッカーに、どんどん活かしていきたいと思っています。

第一席

お茶のひとり歩き

横浜市立東高等学校2年（神奈川県）

向井 こゆき

「シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ」。我が家の休日の朝の音である。ちょうど一年前、この学校茶道エッセイを機に、私は茶道における一つの目標を立てた。それは「人に感謝の気持ちを込めて、お茶を点てること」。この目標を叶えるべく、まずは一番身近な家族から練習を積むことにした。近所のスーパーで、初めて自分のお小遣いで抹茶を購入した。今までの人生でお茶コーナーをこんなにじっくり見たことはなかったが、なんとも種類の多いことに驚いた。そして一番お財布に優しい、袋にはいった抹茶をチョイスした。きっと味なんてどれも変わらないと内心想いながら…。

毎週末、朝食前に家族に向けて抹茶を点てる事が日課になった。初めはみんな、美味しい、やっぱり抹茶は落ち着くねなど嬉しい言葉をかけてくれたが、数週間経つと同じように点ているのに、やれ味が薄いだとか最後の一口がだまになって苦いだとか、お湯がぬるいとか、正直イラッとした。こんなに気持ちを込めて点てているのに。

一人、部屋で原因を探る。批判は受け止め、改善してこそ上達するものと頭ではわかっているけど、心が追い付いてこない。ザワザワする。振り返ると一つ心に引っ掛かることがあった。お茶を早く出したい、喜んでもらいたいと思うがあまり、その過程を大切にしていたのかと。確か先輩は、お茶を点てるときは、お茶を漉す一手間を惜しんでいなかったはず。お湯の温度



やタイミングもしっかり確認してははず。茶筌の使い方にも技法があったはず。私は、それらを全てすっ飛ばして、お茶を目の前の相手に早く届けたい、喜んでもらいたい、そんな結果ばかりに目をとられていた気がする。伝統を軽んじ、技術、技法をないがしろにしたお茶は、ただの自己満足にすぎない。どんなに熱い思いや熱意があっても、知識や技術のないお茶は相手には届かないと思い知らされた。

この気付きから、部活のお稽古やお茶会、毎週末の家族のお茶点てへの取り組み方、意識を今までと変えてみた。先生はいつも茶道の「道」は人を見て学び、言葉で説明出来ない部分まで読み取ることだとおっしゃっている。部活では、みんなのお点前を以前よりもしっかり観察するようにし、お茶会で自分の役割をいただいたときには、予習を欠かさず行った。お茶を点てる時には、泡がしっかり立つようにお茶碗を温めること、抹茶を漉すこと、より細かい泡にするため茶筌の動かす位置をちょっとずつ変えること。どれも家でお茶を点てる時にやるようにした。そして一つ一つの所作や、工夫はすべて意味のあるものなのだと実感する。意味も分からず、ただやっていた時には垂れ下がっていた糸が、理解した瞬間にピンッと張り頭の中で煌めく。お客様への説明を何度も読み返し練習していると、伝統の大切さや知識の必要性がひしひしと感じられた。とにかく深い世界なんだと。

まもなく茶道と向き合う目標をたててから1年が経過しようとしている。もし、1年前のこのエッセイの場で、目標を設定していなかったら、決してこの1年を振り返ることなどなかったであろう。知識や技術もないままに、自分の気持ちや情熱だけで満足して、今のお茶が一番だなんてうぬぼれて、美味しいと思わないなんて相手が悪いなどと人のせいにしたりして、目標達成も上達もほど遠かった気がする。人に感謝しながらお茶を点てるということは、一朝一夕にできることではない。時間がかかるものなのだ。伝統を守り、知識や技術の土台をしっかり身に付けて、初めて相手に気持ちを込めてお茶を差し出す資格を持つことができるのではないか。

決してこの一服に満足しない、妥協しない精神を新たな目標に加え、またこれからの1年お茶に向き合っていくと決めた。

第一席

「今」の大切さ

富山市立奥田中学校3年（富山県）

吉野 凜

「一期一会」、茶道を始める前までは、日常の中で気に留めたことがない言葉だった。

ある日、母から僕が点てたお茶を飲んでみたいと言われ、振る舞うことになった。自宅には茶道の道具がなく、ある物で点てたお茶だったが、母は僕の所作一つ一つを真剣に、そして時折笑みを浮かべながら見ていた。家族になにかを振る舞うことが初めてだったこともあり、気恥かしさと、今までに感じたことのない緊張感があった。茶碗で点てたお茶はお世辞にも美し



いものではなかったが、母は「嬉しい、すごく美味しい」と瞳を輝かせて喜んでくれた。僕が照れかくしでぶっきらぼうに「ただのお茶だよ」と言うと、母は微笑みながら「そんなことないよ、今まで飲んだ中で一番のお茶だよ」と言ってくれた。その時、嬉しさが込み上げてきて、「ありがとう」と僕の緩んだ口元から自然と、感謝の言葉がこぼれた。

思春期の今、家族を煩わしいとさえ思ってしまうこともあるが、思わず「ありがとう」と口にした自分自身に驚いた。母は笑いながら「ありがとう」と返し、二人で笑い合った。その時、その瞬間をととても心地よく感じ、その出来事が特別な宝物になった。そして、初めて「一期一会」を感じた。

特別なことがないと一期一会ではないと思い込んでいたが、気付いていなかっただけで、日常の中に一期一会は傍にあった。茶道は、当たり前前の生活の中にある一瞬の「今」を特別なものと気付かせてくれ、人と向き合う温かさと大切さに触れ合わせてくれる。

僕が生きる今は、効率や成果が重視され、人間関係が希薄になりがちだ。しかし、茶道では相手を思いやる心を何よりも大切にす。忙しい日常の中で、僕たちはつい「今」を忘れ、過去や未来に心を奪われがちだが、茶道は「今この瞬間」に全神経を集中させることを教えてくれる。

茶室の静寂の中で、僕は自分自身と向き合い、他者との絆を感じ、時間の尊さを学んだ。これからも茶道を通じて心を磨き、「今」を大切に生きていきたい。

第一席

茶道を通じて感じたこと

石川県立飯田高等学校2年（石川県）

道下 ひな乃

私は昨年、高校生になって茶道部に入部した。それまで保育所の時や市の文化祭で抹茶をいただいたことはあったけど、お茶を点てたことはなかった。

高校の茶道部に入部したのは、単に運動が苦手な運動部に入りたくなかったから。しかし茶道にハマるまでに時間はかからなかった。先生に習ったお作法には意味があり、毎回背筋が伸び、新鮮な気持ちになった。また日本古来の伝統に触れているという日本人としての喜びや誇りなど、今まで経験したことのない気持ちに浸った。

98歳になる私の曾祖母が茶道の師範の資格を持っていることは、随分と前から知っていた。しかし私は興味がなかったもので、抹茶を勧められてもお茶道具を見せられても、見て見ぬふりをしてきた。今思えばなんと冷たいことをしたのだろう、と反省した。

ある日私は部活で先輩を前に納得のいくお点前を披露するために、自宅で曾祖母に手ほどきを受けた。曾祖母は「覚えとるかな」言いながらも熱心に教えてくれた。そしてその曾祖母の顔がうれしそうだった。茶道部の先生と同じことを言うなあと思いながらも、黙って聞いていた。お茶の味なんて誰が点てても同じだと思っていたが、曾祖母が点てたお茶はとても深い味



だった。曾祖母から色々な道具をもらった。「ばあばの形見に受け取ってね」と言われ、複雑な気持ちになったが、曾祖母と共通の趣味ができたようでなんだかうれしい。実は、最近耳が遠くなってきた曾祖母と話すことが億劫になっていた。何度も言わないといけないし、とても大きな声で言わないといけないからだ。そんな曾祖母と私を結びなおしてくれたのが、茶道だ。

私は茶道からたくさんのことを学んだ。一番は何と言っても「おもてなしの心」だ。

昨年の子年の能登半島地震で、私たちの生活は一変した。当たり前だと思っていた、自宅で寝ること、温かいご飯を食べる事、電気がつくこと、お風呂に入ることが一瞬にしてできなくなった。しかし和倉温泉では、そんな非常時でさえ女将がおもてなしの心で宿泊客の安全を守ったという話を新聞で読んだ。「その心は一に情報、二にトイレ、三四がなくて、五にお茶」という記事を読んだとき、衝撃を受けた。

茶道から学ぶ「おもてなし」は、心を配ること。これは茶道だけでなく、全てのことに言えることだと思う。

私はまだまだ茶道を少しかじっただけであるが、高校を卒業して茶道部じゃなくなっても、時には自宅で曾祖母とお茶を点てよう。そして「おもてなしの心」を追求しようと深く心に誓った。

第一席

茶碗に映る一瞬の世界

浜松聖星高等学校2年（静岡県）

富田 琉杏

茶碗に映る一瞬の世界が、私を惹きつけた。

高校に入学して茶道を始めたとき、まず驚いたのは、所作の一つひとつに細やかな決まりがあることだった。立ち方、座り方、道具の持ち方や置き方、日常では意識したことのない動作ばかりで、最初は頭で覚えるのに必死だった。稽古を重ねるうちに、体が自然と動きを覚え、無意識に手が動いたときの感動は忘れられない。形を学ぶことで、心も整っていく。その瞬間、茶道の魅力に強く引き込まれた。

やがて私は、お点前そのものだけでなく、道具や抹茶、和菓子にも関心を持つようになった。お茶碗に描かれた文様の一つにも、季節の移ろいや作り手の思いが込められていることに気づくと、目の前の器が単なる道具ではなく、日本の文化や四季、伝統とつながっていることを実感した。特に、京都で出会った「紅葉に山雀」という茶碗には一目惚れした。手に取った瞬間、その小さな茶碗に秋の風景と職人の心が宿っているように感じ、今でもこの茶碗でお茶を点てるたびに、京都で感じた空気や四季の彩りを思い出す。また、お稽古の際に先生がお召しになる着物の美しさにも心を奪われた。色や柄、帯まで茶室と調和していて、所作と共に見るたびに目が離せなくなる。着物のしなやかな動きや季節感あふれる色合いには、茶道の所作や道具と同じように日本の美意識の深さを体現しているように感じた。



稽古を通じて、私は「和敬清寂」という茶道の精神にも出会った。和やかに人と調和し、互いに敬意を払い、心を清らかに保ち、静けさの中で自分を整える。この四つの姿勢は、茶席に限らず、日常生活においても大切だと思う。友人や家族との関わりの中で、一呼吸おいて相手を思いやる余裕を持つことができるようになったのは、茶道から学んだ大きな変化である。

さらに映画『日日是好日』を観たことも、茶道への理解を深める大きなきっかけとなった。主人公が稽古で苦戦するシーンの中で、「頭で考えすぎるよりも、回数を重ねるうちに自然に手が動く」という言葉に、強く共感した。まさに私自身も、最初は手順を覚えるのに必死だったが、続けるうちに体が覚え、心も自然に落ち着いていった。映画を通して茶道は理屈ではなく、心と体で学ぶものだということを改めて感じた。

茶道を学んでから、私は日常の中の小さな変化にも敏感になった。床間に置かれた茶花、茶碗の意匠は「今この瞬間」を大切にすることを教えてくれる。春には桜、夏には涼やかな硝子、秋には紅葉、冬には雪景色。季節を映す茶道具を通じて、日本の四季の美しさを改めて感じるようになった。そして心が穏やかになる瞬間も増えた。

茶道を通じて私が感じたことは、伝統はただ受け継ぐものではなく、今を生きる私たちが心で味わい、育むものということだ。お点前の正確さを追い求めるだけでなく、その背後にある哲学や精神を受け継ぎ、日常の中で実践していくことに意味がある。これからも茶碗に映る一瞬の世界に心を込め、日本文化の豊かさを未来へとつなげていきたい。

第一席

私が魅せられた茶道のこころ

静岡県立藤枝西高等学校2年（静岡県）

森 葉月

私が所属する部は「日本文化部」という、少し珍しい名前を持つ。厳かで格調高い響きだが、その活動内容は箏曲と茶道が一つになった、欲張りな学び舎だ。限られた時間の中で二つの道を究めるのは容易ではない。特に茶道においては、その奥深さゆえに自分の未熟さに対するもどかしさを感じることも少なくない。

だが、茶道への興味は幼少の頃から、私の心に小さな芽生えがあった。幼稚園で初めて茶筌を握り、お茶碗の底でお抹茶が「こずんだ^{*}」あの日。上手に点てることなどできず、ただ混ぜただけのお抹茶だったが、口に含んだ瞬間の、あの苦みの奥にあった不思議なおいしさは今も鮮明な記憶として残っている。

本格的に茶道と向き合うきっかけは、高校に入学し、体験入部での先輩方のお稽古風景だった。静謐な空間で繰り返される、一つ一つの所作に込められた途方もない工夫と集中。覚えることの多さに圧倒されつつも、それ以上に、この道が持つ魅力に強く惹きつけられたのだ。

月に3、4回、先生にご指導をいただく茶道の稽古は、文化祭や地域の茶会に向けた実践の場でもある。入部して間もない文化祭では、初めての「お運びさん」として、多くのことを吸

^{*}こずんだ…「沈んだ」の方言



取しなければならなかった。歩き方、お茶碗の持ち方、立ち居ふるまい、言葉遣い、そしてお辞儀。どれもが日常生活には馴染みのない動きでありながら、その一つ一つに、お客様をもてなす「配慮」と「礼儀」が凝縮されていることを知った。特に印象深いのは、指先まで意識して歩くことや、お辞儀の時、頭をゆっくりと丁寧に上げること。わずかな所作の違いが、見る人の心に心地よさをもたらす、大きな「美」へと昇華する瞬間だった。

ある時、文化祭に向けてのお稽古中、先生から「お淑やかさがある」と褒めていただいた。実際は、覚えたての基本作法を必死にこなしていただけだった。しかし、心の中には褒めていただいただけでなく、茶道を学べる喜びがあった。

お稽古が進むにつれて「装う」ことの重要性を感じるようになった。茶杓や茶筌のような軽いものを重そうに、銀瓶や鉄瓶のような重いものを軽そうに扱う。これらは見えない努力と集中が、見る者を楽しませる美学なのだを知った。実際、淀みなく進むお点前は、迷いさえ感じさせず、その一挙手一投足が見る人を静かに惹きつける。

何より、私はお茶を点てるその瞬間が好きだ。お抹茶とお湯がお茶碗の中で巡り会い、茶筌を軽やかに振るたびに、抹茶の芳醇な香りがふわりと立ち上る。そして、口当たり滑らかなきめ細やかな泡が立つ。この一連の動きの中に、何とも言えない「風情」と「満足」がある。この瞬間がどれほど尊いものか、身をもって感じるのだ。

先輩の中には、この部活動がきっかけで将来の進路を決めた方もいる。それほどまでに茶道は、人の人生さえも変えてしまうほどの深く大きな経験をもたらすものなのだろう。茶道に魅了された者は、まるで別人のように変わる。真摯に取り組む意欲が湧き、先生方の教えに深く興味を抱き、学ぶこと自体が心から楽しいと感じる。お稽古の時間だけは、他の全ての優先順位が切り替わり、茶道のことだけが世界を支配する。そんな抗いがたい「引力」を、私はこの道に感じている。

これからも、「おもてなしの心」を胸に、人を魅了する茶の湯の作法と精神を深く意識し続けたい。

第一席

和敬清寂のひとしづく

常葉大学附属常葉高等学校1年（静岡県）

高田 華帆

私は静岡県で生まれ育った。といえば、多くの人がお茶を思い浮かべるだろう。子供の頃から、温かいお茶が当たり前のように振る舞われ、私にとってお茶は、日常的な飲み物だった。そんなお茶に、こんなにも奥深い世界が広がっているとは知らなかった。

高校に入学し、茶道部の和やかな雰囲気に触れたとき、私は直感的に惹きつけられた。日本人として、お茶の作法を身につけたいという思いが、茶道部の門を叩ききっかけとなった。

初めて部室の畳に足を踏み入れたとき、空気の澄んだ清々しさに驚いた。普段の喧騒から切



り離された、静かで落ち着いた空間。そこに座るだけで、心がすっと落ちついていくのを感じた。稽古が始まると、一つひとつの動作に驚くほどたくさん決まりがあることを知った。先生や先輩方が見せる流れるような所作は、まるで一つの芸術のようだった。自分の不器用さがもどかしかったが、同時に美しい所作を身につけたいという強い憧れが湧いてきた

茶道の稽古で最も心に響いたのは、「和敬清寂」という言葉だ。先生が教えてくださったこの言葉は、四つの精神を表しているという。「和」は互いに和やかに心を通わせること。「敬」は尊敬の念を持つこと。「清」は心身を清らかに保つこと。「寂」はどんなことにも動じない心を持つこと。

初めて抹茶を点てたときのことは忘れられない。ただ茶筌を動かしても、なかなか泡が立たない。焦るほどお湯は飛び散り、茶碗の底には粉が残った。その時、先生の「心を込めてゆっくり点てると、美味しくなる」という言葉にハッとした。私はただ「早く、うまく」としか考えていなかった。その瞬間、「和敬清寂」の「和」と「敬」の意味が、少し分かった気がした。改めて茶碗の中の抹茶と向き合い、丁寧に茶筌を動かすと、少しずつ滑らかな泡が立ち始めた。これはきっと「清」と「寂」の精神なのだろう。

茶道で学ぶことは、作法だけではない。亭主と客の間で交わされる「おもてなしの心」、季節の移ろいを表現する和菓子や道具。そして、「和敬清寂」という、人としてどう生きるべきか教えてくれる言葉。これらは、日本の文化の根幹をなすものだと感じている。まだ茶道の世界に足を踏み入れたばかりだが、この部室で、私は日本人としての心、そして静岡県出身者としての誇りを、改めて見つめ直している。

これからも、茶道を通して、奥深い日本の文化に触れ、心を豊かにしていきたい。そして、いつか、この部室で、「和敬清寂」の心を込めてお茶を点て、大切な人を静かに迎え入れられるようになりたい。それが、今の私のささやかな目標だ。

第一席

小さな恩返し

西尾市立鶴城中学校3年（愛知県）

榊原 唯愛

「このようにしてお茶碗を回しましょう」。私は茶道を始めて2年の中学2年生。そんな私が、茶道を教える立場になるとは夢にも思わなかった。

令和6年8月、私が所属する中学校茶道部は、文化庁が企画する「伝統文化親子教室」の『西尾の抹茶』体験教室に、先生役として参加することとなった。先生からこの企画に参加することを伝えられたとき、私はきちんと教えることができるのか不安に思った。

11月の初回では、お茶のいただき方のお手本をする係になった。部活動で毎回お茶をいただいているので、その役割を聞いた時には、「なんだ、簡単な役目で良かった」



と安心しきっていた。

いざ本番になると、小学生やその親御さんなど、普段の部活動とは違う人々が集まり、雰囲気も全く異なっていて、緊張してしまった。自分がお手本を見せる順番になると、自分に全員からの視線が集まり、緊張がさらに高まり、手が震えて思うように練習した動作ができない。先生が私の動きをフォローしてくださり、その場はなんとか事なきを得た。イベントが終わった後、私は「せっかくのイベントなのに、私のせいで進行が遅れてしまった」と落ち込んでしまった。

2回目は、お箸の使い方について教える係を担当したが、初回の失敗がトラウマになり、力が入りすぎて手が滑ってしまった。この役割すら、十分に果たすことができず、母親に相談した。

「やはり私には、教えるような役割は無理なんだ。次のイベントは欠席したい」

「唯愛が一生懸命、部活動に取り組んでいることは知っているよ。しっかり練習して準備すれば、今度は絶対うまくいくよ」

母に励まされ、3回目も参加を決めた。自分の担当する盆略点前を、帛紗や道具の持ち方そして姿勢にも気を配り家で毎日稽古した。

12月の本番では、前回以上に人が多く、動作も複雑で緊張したが、稽古での動きをイメージしながら、一つずつ丁寧にお点前を行った。無事、自分の役割を全うすることができたときは、心の底からホッとした。

イベント後、小学生の参加者から、「茶道って楽しいね」と話している声を聞いたり、親御さんから「同世代の中学生が教えていたので、これまで縁がなかった日本の伝統文化に子供が興味を持ってくれた」という感想を聞いたときは、心から嬉しかった。

イベント後の最初の部活動で、先生から感想を聞かれ、正直な気持ちを答えた。

「参加してどうでしたか」

「中学生で、まだ茶道経験が2年しかない自分が他の人に教えるなんて無理だと思っていたけど、稽古の成果が出せて良かったです」

「茶道で一番大切なのは年齢や経験ではなく、目の前にいる人を思って、おもてなしをする心です。その心があれば、中学生でもきっと相手の心に届いて、茶道の輪を広げることができるはずですよ」

今回のイベントを通じて、私は教えることの難しさと、分かってもらえたときの嬉しさを学ぶことができた。

失敗もしてしまったが、茶道の魅力を伝えることで、色々なことを教えてくれた茶道に小さな恩返しができると思う。これからも挑戦を続けて、茶道の輪を広げ、恩返しをしていきたい。



「上手に点てれましたね」

愛知県立横須賀高等学校2年（愛知県）

若山 結衣

ある日、先生にお茶を点ててさしあげた。無地の、真っ黒に塗られたお茶碗で。

「お茶をどうぞ」

「ありがとうございます」

挨拶を終え、立ち上がろうとしたときだった。眩しい笑顔で先生が言った。

「上手に点てれましたね」

その言葉に、一瞬時が止まったような気がした。茶道部に入部して約1年。静かな部室で先生の瞳には、どんな顔をした私が映っていたのだろうか。

茶道部に入ってすぐの頃は、何もかもぎこちなかった。お茶碗の持ち方や茶杓の扱い方、一つひとつの動作に意味があることを知り、その奥深さに圧倒された。先輩方の滑らかな動きに比べ、私の動作はどこかカクカクしている。何度も失敗を繰り返しては焦りを感じていた。

それでも、私は稽古に通い続けた。特に、茶筌がシャカシャカと音を立てる時間が好きだった。その音は私の心を落ち着かせ、お茶を点てることに夢中になった。初めは泡が立たずサラサラだったお茶が、練習を重ねるうちにとろりとクリーミーな泡を纏うようになっていった。

初めて自分で点てたお茶の味は、格別だった。苦みの中にほんのりとした甘みと香りが広がり、「もっと上手になりたい」と強く思った。

茶道部は、賑やかな学校生活から離れ、静かに自分と向き合える特別な場所となった。お茶に集中する時間は、心を穏やかにし、心地よかった。茶道は、私にとってかけがえのない時間を与えてくれたのだ。

1年が経ち、私は少しずつ自信を持てるようになっていた。入部当初に比べ、少しは様になっているのではないだろうか。そんな思いを抱きながら、いつものように励んでいたある日。そう、あの日。

「上手に点てれましたね」

あの瞳には、ただ真っ直ぐに先生を見つめる私の顔が、映っていたんだろう。その顔は晴れやかな笑顔だったに違いない。あの瞳は、私の喜びを、そしてこの1年の成長を、すべて受け止めてくれていた。先生はずっと、温かく見守ってくれていたのだ。

茶道で大切にされている言葉に、「和敬清寂」がある。調和と尊敬を主客の心得とし、清浄と静けさを茶道全体に対する心得とする言葉。先生の瞳に映った私の顔は、きっとこの教えをほんの少しでも体現できた姿だったのだろう。茶道は、人を思いやる心、そして自分と向き合うことの大切さを教えてくれた。

これから、この大切な時間を胸に、私は歩んでいきたい。そして、いつか私も、誰かを温かく見守れるような人になることを、心に誓う。



決まりのなかでほどけていくもの

滋賀県立石山高等学校3年（滋賀県）

葛本 みな

深く澄んだ、古のあまやかな香が静寂の流れに溶けこんでゆく。湯のたぎる音に耳をすませ、淡く差し込む光の中で、私はただ静かに息をしていた。熱と会話する中でふと思う。この空間には「しぼられた自由」があるのだと。

茶道にはいくつもの作法が存在する。私はそれに直面したとき、「自分に出来るのだろうか」と戸惑いを隠せなかった。初めは帛紗捌きから、茶杓や棗の清め方などを順に身につけていく。ひとつひとつ作法があって、それが組み合わされることによってひとつのお点前となっていくのだ。茶道を始めて間もない頃の私は作法を覚えることに必死で「ただの作業」になっていた。しかし、2年という時の中でそれが私の中で変わってきていた。お点前に集中しているときは頭を空にすることができ、心を整える時間へと変化していったのだ。その頃からである。私の中での茶道が変わっていったのは。

作法を覚えると心に余裕が生まれる。すると今まで気づかなかったことが目に入ってくるようになる。ここで目の前に二つの道が現れた。一つは慣れによって努力を怠る道、もう一つは相手のことまで気遣いながらより精度を高める道。私は後者を選んだ。その瞬間私の前には大きな道が開けたのだ。相手のことを思って動けるようになるには自分の意志が必要である。型に倣っているだけではいけない。私はそこで初めて「自由」を知った。自由といっても、好き勝手やることではない。「自分で選んで動けること」である。もし型通りに進めることに捉われて周りのことが見えていなければ、まだ正客がお菓子を食べ終えていないから少しゆっくり進めようなどという気遣いはできない。これが「しぼられた自由」である。

自由。それは基礎をつきつめた先に見えるもの。この考え方は茶道だけではなく、学業や芸術にも当てはまる。日常生活の中でも、「丁寧な心をこめて動くこと」が自分らしい自由になるかもしれない。だから私は茶道で学んだ「しぼられた自由」を胸に刻んで生きていきたい。

未来を楽しむ

兵庫県立御影高等学校2年（兵庫県）

藤井 彩乃

私は床の間にあるお花が好きです。なぜなら、同じ花でも生ける人によって全く違った風情になるからです。ある日自分が生けた花と同じ花をまた別の日に違う人が生けると、花がしぼ



んでいたり、花の組み合わせや葉の数も違ったりして、見え方が全然違って面白かったのを覚えています。また、お花は自分のそのときの感情や、その日の茶会のテーマなどを表現することができて、それによっても風情が違ってきて、たくさんの楽しみ方ができていいなと思います。またお花は、色味の少ない茶室の中で一際存在感があって、茶室を彩ってくれる欠かせない存在だと思っています。

そして、私は利休道歌の中で「余所などへ花をおくればその花は開きすぎしはやらぬものなり」という歌がお気に入りです。この歌はお客様にお花をプレゼントするときは開きすぎているものの方が良いという意味です。私はこの歌を知るまでは、お花は満開の状態が最高に綺麗で美しく、お客様に拝見してもらうにしても、持って帰ってもらうにしても、それが最適だと思っていました。しかし茶道の世界ではあえて満開の少し前の状態の花を提供するということを知り驚きました。またそれとともに、お客様に、飾られたお花の「過去」を想像してもらいながら、現在の姿を見て、満開へと向かっていくその花の「未来」を楽しみにしてもらおうという考え方が、個人的に好きで、お客様を飽きさせないための最大限のおもてなしだなと思いました。これからは亭主側になったらそれだけのおもてなしの精神をもち、お客様側になったらお花を飾った人の思いを受け取り、感謝も忘れずに拝見を行いたいと思いました。

また、茶花にはたくさんのルールがあります。例えば匂いの強い花は使ってはいけないことや、奇数本の花を入れるようにするなどです。正直私は何度教えていただいても、いつもどれかは忘れてしまいます。でも、お花ひとつでもこれだけの教えやルールがあって、それだけのものを、利休さんはじめ、受け継いで、守ってきた人たちがいるのだと思うと、茶道への愛を感じるし、私の茶道への愛もより一層高まりました。

第一席

心が座る場所

福岡県立修猷館高等学校1年（福岡県）

池ノ上 心

茶道部に入ってまだ日が浅い私にとって、稽古は新鮮さと戸惑いが入り混じった時間だ。帛紗捌きも茶筌の扱いも、頭で覚えているはずなのに、手元に移すと急にぎこちなくなる。ある日の稽古でも、私は動きを途中で止めてしまっていた。手の中の布が思うように流れず、次の手順を探すように視線が泳ぐ。

その時、隣にいた同級生が穏やかな声で「こうするとやりやすいよ」と言って、自然に手本を見せてくれた。同じ場の呼吸の中でそっと差し出された助けだった。ただその動きが、私の目にはとても鮮やかに映った。

同じことを学んでいるはずなのに、その手元は驚くほど滑らかで、動きと動きの間に澄んだ空気が流れていた。帛紗がひらりと形を変えるたびに、そこに込められた感覚や意図までもが静かに伝わってくるようだった。



その瞬間、茶道における「おもてなし」の意味が、少し輪郭を持って胸に迫ってきた。それは決して派手な振る舞いではない。相手の様子を感じ取り、必要なときに必要なだけ手を差し伸べること。それが、茶道が教えてくれる本当の「おもてなし」であると感じた。思えば、茶道部に入部する前の私は、「お点前」というものを誤解していた。小さい頃、目の前でお点前を拝見する場面があった。そこにあった所作は、当時の私には理解することは難しかったけれど、とても美しいものだった。けれど私はその美しさ故に、その所作を「見せるためのもの」だと思っていた。一つ一つの動きが美しく整えられていることが目的で、それを鑑賞するものなのだ。けれど自分が点前を学ぶ立場になってみると、その印象は静かに塗り替えられていった。

茶碗を置く角度にも、帛紗を払う指先にも、全ては「目の前の人のため」という理由があった。湯を注ぐ音や茶を点てるリズムさえ、客が落ち着ける空気を整えるための要素を感じた。お茶を差し出す瞬間は、そのすべての積み重ねの終着点に過ぎない。「おもてなし」は茶碗が客の手に渡るよりずっと前から始まっているのだ。

同級生の手元を見ていて、そのことを改めて思い知らされた。彼はただ帛紗を捌いていただけかもしれない。けれどその背後には、目の前にいないけれど「相手を思う」という心が座っていて、その心が動きを決めているように見えた。それは形を真似るだけでは届かない領域で、だからこそ私の心に深く刺さったのだと思う。

稽古を重ねるほど、私は茶道の中に「季節」や「場の設え」といった細部の意味を見つけるようになった。花が一輪入れられていることも、炉の湯気が立ち上る音も、すべてがその場の時間をつくっている。それらは決して背景ではなく、客をもてなすための一部として息づいている。茶道は、そうした気配りの総和で成り立っているのだと気づくたび、自分の背筋も自然と伸びる。

あの日の稽古以来、私は「形を覚える」ことだけでなく、「心を座らせる」ことを意識するようになった。どれだけ正しい手順を覚えても、心が浮ついていれば、その動きはどこか落ち着かない。「おもてなし」を成し得ない。逆に、心が定まっていれば、小さな動きにも確かさが宿る。「おもてなし」の精神が宿る。茶道はそういう、心の鏡のような場所だと思う。

和作法室に座り、静かな空気の中で一つ一つの動きを重ねていると、不思議と自分の呼吸も深くなる。それは学校生活の中で慌ただしくすぎる時間とはまるで違う流れで、自分の内側に落ち着きを取り戻す感覚があった。その時私は、茶道がもたらす「心が座る場所」を、少しだけ見つけられた気がする。

第一席

茶室、それは私の居場所

福岡県立嘉穂高等学校2年（福岡県）

武下 桃佳

あの春、私はもう一つ居場所が増えた。



桜の花びらが散り葉桜に変わる頃、私は初めて茶室を訪れた。友人に誘われ茶室へと繋がる襖を開けると、そこにはどこか厳かで暖かい雰囲気漂っていた。その中心では凜とした先輩がお点前をしていた。鳥の鳴き声、水の流れる音、窓から迷い込んだ風が風鈴を揺らす音、全てが先輩のお点前を引き立てていた。その光景は、時間がゆっくりと流れているようで、まるで異世界に足を踏み入れたような心地だった。私は確信した。茶道部に入部するのだと。

入部して分かったことがある。凜としていた先輩方は、天然で優しくて親しみやすい人だったということ。きりっとした横顔の裏に思わず笑ってしまうような可愛らしい一面が隠れていて、そのギャップに心がほどけた。同時期に入部した同級生と切磋琢磨した日々は何にも代え難い貴重な時間だったということ。放課後の茶室に差し込む夕陽の中で、失敗しては顔を見合わせて笑い合った瞬間は、今でも宝物のように胸に残っている。茶道の先生が私たちに教えてくれた一つ一つが綺麗なお点前を完成させるということ。

私は茶道というものに触れて気付いた事がある。それはおもてなしの難しさである。相手にとってなにが一番最適な対応か、言葉遣いに失礼はないか、その場にあった行動が出来ているか、など考えなければならないことはたくさんあると思う。おもてなしには全員に当てはまる正解がなく、一人一人正解が違うからこそとても難しいと思う。しかしそれは同時におもてなしの楽しさであり、面白さだと思う。小さな所作ひとつで相手の表情がやわらぐ瞬間に立ち会えることほど嬉しいことはない。

先輩方と過ごした日々はあっという間に過ぎ去り、入部を確信したあの日から約1年経った。私たちは先輩方を見送り、後輩たちを迎えた。あの日と変わらず茶室に繋がる襖を開けると、窓から迷い込んだ風が風鈴を揺らし、豊の香りが私を包む。部員たちの楽しそうな声も聞こえる。苦楽を共にした友人たちやかわいい後輩たちが居る茶室は、今までもこれからも私の大切な居場所である。

第一席

にじむ想いと、つながる心

大分県立大分舞鶴高等学校2年（大分県）

植木 佑香

私が茶道部に入部したのは高校1年生の秋です。その頃はどこの部にも所属しておらず、学校での人間関係も少し悩んでいた時期でした。そのことを母に相談すると、交友関係を広げるためにも部活動をするのを薦められました。母以外の家族にも入部を後押しされ、私は何かの部活動に参加することを決めました。

しかし、それまでの日々を淡々と過ごしてきた私は特別やりたい事や始めてみたいスポーツなど無く、どの部に入部しようか迷いました。そんな時、母や母の叔母が昔、茶道をしていて楽しかったと話していたことを思い出しました。そして、そんな二人の姿に憧れ、「茶道部」という部活に強く惹かれていき、1年生の秋という中途半端な時期にも関わらず体験入部に行き



ました。

体験入部に行って私が一番最初に感じたのは、作法室だけの特有の香りです。畳のい草の香り、お抹茶をこす時に広がる青葉のような香り、炭の香りなど様々な香りが組み合わさって、作法室ならではの独特な落ち着いた空間が出来上がっていました。私はその香りを確かめた瞬間、自分の背筋が伸びたような感覚がありました。

先輩が炭手前を始めたとき、作法室全体に一気に張りつめた空気が流れたように感じました。それまでの雰囲気が一変し、私の心の中にも自然と緊張感が生まれました。何気ない所作の一つひとつに、先輩の真剣な思いや丁寧な積み重ねが表れていて、とても印象に残りました。先生の畳の歩き方や静かな佇まいも凛としており、私はその姿を尊敬の眼差しで見つめていました。また、部員のみんなが「お客様には丁寧におもてなしをしよう」、「相手への敬意を忘れないようにしよう」という気持ちをもって動いていることが伝わってきて、私自身もそうありたいと思いました。一回一回の所作には優しさや心配りがにじんでいて、それが茶道の魅力の一つだと改めて感じました。

茶道部に入部してから、「一期一会」という言葉の意味を深く考えるようになりました。友人や先生との出会いに加えて、日常生活の中で出会う様々な人とのご縁に感謝しようと思うようになりました。入部前に悩んでいた人間関係も、違う視点で見つめ直し受け止めるきっかけにもなりました。

茶道はお作法の多さが目立って難しそうといった印象を持っていましたが、実際には相手を思いやる心やその場全体に気を配る繊細さが求められる奥深い世界だと気が付きました。お作法はその一つひとつに意味があり、形式だけでなく心のあり方が大事なのだと学びました。

これからも毎回のお稽古を大切に、自分から積極的に茶道を学ぼうとする姿勢をもって臨んでいきたいです。茶道と向き合いながら育まれてきた心の在り方を、日々の人間関係の中でも生かしていけたらと思います。そしてどんな時でも落ちついて優しい心を忘れずにいられる、そんな自分でありたいです。



- 小原 美月 (藤女子高等学校)
- 児玉 優莉 (宮城県仙台西高等学校)
- 石田 侑 (文星芸術大学附属中学校)
- 松崎 夏葉 (文星芸術大学附属中学校)
- 櫻井 亜実 (伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校)
- 藤原 愛梨 (浦和実業学園高等学校)
- 吉田 ひかる (國學院大學久我山高等学校)
- 前田 七海 (世田谷区立富士中学校)
- 三上 由暉 (東京都立桜修館中等教育学校)
- 阿部 桃葉 (神奈川県立麻溝台高等学校)
- 西尾 眺翔 (鶴見大学附属高等学校)
- 松本 風香 (横浜市立東高等学校)
- 小林 眞子 (山梨県立吉田高等学校)
- 藤田 楓 (静岡県立榛原高等学校)
- 萩原 芽依 (浜松市立北星中学校)
- 平林 由梨 (愛知県立横須賀高等学校)
- 大藏 千尋 (名古屋市立山王中学校)
- 森田 悠月 (滋賀県立石山高等学校)
- 渡部 慶 (京都市立紫野高等学校)
- 佐野 千晴 (ノートルダム女学院高等学校)
- 尹 輝相 (京都文教高等学校)
- 松本 怜奈 (兵庫県立福崎高等学校)
- 阿部 花音 (賢明女子学院高等学校)
- 道本 永波 (兵庫県立山崎高等学校)
- 島田 愛斗 (香川県立農業経営高等学校)
- 大中 楓 (高知県立高知国際高等学校)
- 永富 咲良 (福岡大学附属大濠高等学校)
- 田口 夏湖 (福岡県立修猷館高等学校)
- 畑瀬 由衣 (福岡県立修猷館高等学校)
- 中尾 圭恵 (福岡県立小郡高等学校)
- 山崎 希穂里 (大分県立大分舞鶴高等学校)
- 川崎 かなせ (宮崎日本大学中学校)
- 戸川 富支和 (宮崎日本大学中学校)



令和7年度 第46回 学校茶道エッセイ集

令和8年2月 発行

発行 一般社団法人 茶道裏千家淡交会総本部

〒602-0073 京都市上京区堀川通寺之内上る
寺之内堅町682番地

電話 (075) 451-5166

F A X (075) 451-3926

<https://www.urasenke.or.jp>

裏千家HP





一盃からピースフルネスを
茶の湯に出会う、日本に出会う